

真剣で世界に恋しなさい！

teymy

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

九鬼家の従者に連れられ川神市にやってきたのは、見た目、言動に幼さを残す主人公・連理。

川神院に紹介された後、『武神』の妹、川神一子と友となり、直江大和に街を案内されながら、彼らの仲間『風間ファミリー』の面々と親交を深めていく。

肩まで伸びた金髪に、白い陶器のような肌。背も低く子供のように純粋な連理にファミリーも心を許し、あれこれと世話を焼いていく。最後に出会ったのは『武神』川神百代。

彼女は連理の力に気が付いた。当然のように連理に言う。

『なあ連理。私と戦ってくれないか？』

『駄目。』

つれない態度に焦れた武神。

つい力試しがしたくなり、避けられるように、しかしかなりの速度で拳を繰り出す。

その瞬間――

.....

皆様初めまして。

初投稿作品です。

至らない文章、至らないストーリー。至らないキャラ設定。

どうか生暖かく見守ってくださいると嬉しいです。

# 目次

## 第一章

プロローグ	幼き日の夢	1
第一話	Welcome to the 川神	4
第二話	危機とは突如こちらへ迫ってくるものである	17
第三話	連理の”お願い”	30
第四話	この世界で生きるために	45
第五話	目に見える事だけが現実とは限らない	58
第六話	連理と世界を繋ぐもの	73
第二将		
第七話	人は誰しも二面性を秘めている	89
第八話	踏み出す為には犠牲になるものもある	101
第九話	季節の変わり目は始まりの合図	112

## 第一章

### プロローグ 幼き日の夢

——お母さん……お母さん……

『連理、<sup>れんり</sup>どうしたの？』

お父さんは？

『お父さんは、お仕事に行っただわ。でも大丈夫。すぐに帰ってくるわ』  
また、悪い人たちが来たの？

『そうよ……今日は、少し近くまで来てしまったみたいね……』  
ボクも、お父さんみたいに動けたらいいのに……

『そうね……お母さんも、はやく連理が元気に動いてる姿が見たいわ』  
今日もちやんと、薬のんだら、元気になれるかな……？

『ええ、きつと』

……注射は？

『注射は、昨日したから、今日はしなくてもいいわ。でも、明日はまた、  
注射の日だから……』

注射は……きらいだな……

『ウフフ……でも、注射しないと、また体が痛くなってしまおうわよ？』  
うん……がんばる……

『いい子ね……さあ、このお薬飲んで、少し眠りなさい』  
うん……また、薬、増えた？

『新しいお薬が、ふたつね……さあ、お休みなさい』  
……おやすみ……お母さん……

……

……

……夢……

夢を、見えた。

ああ、これは、いつのことかな……

この頃は、何一つ疑うことなく、幸せだった。

お母さんがいて、お父さんが仕事へ行って…  
いつか自分の身体が自由に動くようになって…

お父さんの仕事を手伝うために、強くなるんだって、毎日、毎日思ってた。

だんだん増えていく薬に、不安で、怖くて、涙が止まらない日もあった。

そんな時は必ず、お母さんが傍にいて…

『大丈夫、大丈夫：もう少し貴方が大きくなったら、きつと身体も自由に動くようになるわ』

そう言つて頭を撫でてくれた。

ベツトからお母さんを見ると、長くてサラサラした金色の髪が、キラキラと光っている。

光を受けて暖かく輝くその金色が、大好きだった。

お母さんと同じ色の髪をしている自分が誇らしかった。

そのことをお父さんに言うと、いつものように優しく微笑みながら…

『ボクも、お母さんと連理の髪が大好きだよ。とても、とても綺麗だから』

将来はきつと美人さんになるねと、お母さんと同じように頭を撫でてくれる。

お父さんは、自分が思う「正義」を守るために、戦う仕事をしていった。

いつも、お父さんの「正義」を邪魔する人たちと戦っていた。  
ずっと遠くで戦っていて、なかなか会えないことも多かった。

時々、邪魔する人たち、悪い人たちが、家を襲いに来ることもあった。

怖かったけど、お父さんと、お父さんの仲間たちが、いつも守ってくれた。

だから、いつか身体が自由になったら…

お父さんと一緒に皆を守れるように、戦いたかった。  
皆を守る、力が欲しかった。

強くなりたかった。

今、ボクの身体は自由に動く。

薬も、注射もいらぬ体になった。

普通の人よりはやく走れるし、重たいものも持てるようになった。強くなった。皆を守る力を、手に入れた。

……でも、

お父さんも、お母さんも、もういない

仲間たちも、皆いなくなってしまった。

悲しくて、心が痛くて、ずっと泣いてた。

大きな声で、ずっとずっと泣いてた。

ただ、今はもう泣いてない。

どうすればいいか、わかったから。

だから、笑いながら、楽しみながら、世界を楽しんでる。

そして、いつか――

# 第一話 Welcome to the 川神

## 川神院

武術の総本山と言われ、世界にその名を知らしめる寺院に、一人の少女が走りながら入ってくる。

川神一子は今日も鍛錬に励んでいた。

土曜日の朝から日課のメニューを消化する。

その後の予定は決まっていなかったが、やることがなければ今日は一日鍛錬を続ける予定だ。

もちろん体を休めながらの、無理のない範囲での自主トレーニング。

もはや鍛錬は一子にとって趣味、ライフワークの域に差し掛かっていた。

「うーん、今日はファミリーとの予定もないし、お姉さまもどっか出かけてるし…」

”風間ファミリー”

風間翔一、通称キャップをリーダーとした遊び友達。

幼いころからこのファミリーが主な遊び相手で、それは現在も変わらず続いている。

最近ではメンバーも2人増え、最初は意見がぶつかりもしたが、全員で旅行に行ったりと賑やかである。

その中でも一子が一番慕っているのが、『武神』と呼ばれる姉の川神百代である。

育ての親が亡くなり、失意に飲まれていた一子を引き取るよう、川神院総代であり、祖父である川神鉄心に進言したのが百代であった。

一子はその前から百代の強さに憧れており、養子となった今は百代の妹として、”お姉さま”と呼び慕っている。

百代のほうも一子を溺愛しており、修行に勤しむ一子を優しく見守っている。

一子の夢は憧れのお姉さま・百代に並ぶ強さを手に入れ、川神院の



師範代になることだ。

そのための鍛錬は一日として欠かすことはなく、むしろ師範代であるルー・イーにはオーバーワークに気を付けるよう言われてしまうほどであった。

「うー…でも、師範代になるためには鍛錬あるのみよ！勇往邁進！」

好きな言葉を口に出し、鍛錬場へと足を踏み出そうとしたが、その前に後ろから声を掛けられた。

「こんにちわ」

「うわ、つとと…」

逸る気持ちに逆らうようブレーキをかけ振り向くと、そこには見覚えのあるメイド服を着た女性が立っていた。

「あれ？九鬼のメイドさん？」

（気配がなかった…さすが九鬼の従者部隊だわ…）

短い黒髪に、見ようによつては冷たいと思えてしまう表情のメイドの女性は、軽く頭を下げながら挨拶と、要件を伝える。

「突然の訪問、申し訳ありません。九鬼家従者の李<sup>リジンチユ</sup>静初と申します。

本日は川神鉄心様はご在宅でしょうか？」

丁寧な挨拶に、思わず緊張してしまいながらも一子は答える。

「あ、えーと、おじいちゃん中はいると思います。ちよつと待っててくださいね。」

おじいちゃんに伝えてくるので」

そういうと一子は近くにいた修行僧に李の案内を頼み、自分は鉄心を呼びに行くことにした。

「有難うございます。ヒューム・ヘルシングの使いとして会わせたい人物がいる、とお伝え下さい。」

今車の中で待っているのです、一緒に連れて行かせていただきます」

「えい!…あの噂のヒュームさんから？」

聞き覚えのある名前、しかも鉄心から聞かされていた人物の名を聞き驚く一子。

ヒューム・ヘルシング

吸血鬼を倒した一族の子孫で、川神鉄心とは実力を競い合った人

物。

すごい名前が出てきたと、焦りながら鉄心の元へ向かう一子であった。

.....

「ホッホッホ…ヒュームの奴め、しばらくぶりの連絡かと思ったら、なんのつもりかのう」

面倒は勘弁じゃの、と言いつつも楽しそうに目を細める川神鉄心。

一子はそんな鉄心と共に客間へ向かっていた。

2人で歩く廊下の反対、対面から歩いて来るのは、修行僧に先導されながら歩いてくる先ほどのメイド、李ともう一人。

小柄な少女が李の後ろを歩いていることに気がついた。

肩まで伸びている髪の色は、輝くような、しかし派手さは感じず暖かい金色。

少し長めの前髪から覗くのは、雪のように白い肌に、大きな瞳。

少し緊張しているのだろうか。表情は若干強張っている。

(女の子…？可愛い…人形みたいだわ…)

思わずじつと見つめてしまうほどの愛らしさ。

そんな一子をよそに、李は正面に立った鉄心と挨拶を交わしていた。

「突然のご無礼、お許してください。九鬼家従者の李静初と申します。

こちらはヒューム・ヘルシングからの紹介で、出雲連理いずもれんりといひます」

李に背中を軽く押され前に出てきた連理と紹介された少女は、緊張の面持ちで口を開く。

「こ、こんにちわっ。連理ですっ」

どもりながらも名乗る連理に、一子も鉄心も頬を緩めた。

「ほっほっ、こんにちわ。ワシは鉄心という。しっかりと挨拶が出来て良い子じゃの」

「こんにちわ！アタシは川神一子！」

鉄心が褒め、一子が元気よく挨拶すると、安心したのか連理は緊張が解けたようにほにやつと笑みを浮かべた。

緩んだ口から小さな八重歯が少しだけ顔を出す。

(何この子!?!可愛すぎるわ!?!:名前は思い切り日本人ね、ハーフかしら?)

あああああ頭を撫でてあげたい!頭撫でられる気持ちよさを教えてあげたい!)

普段、ファミリーの面々からマスコットとして可愛がられる一子からしても、連理には保護欲を掻き立てられる。

脳内に普段は考えないような思考が溢れ出てきた。

内心で祭りを開いている一子を放置して、鉄心が李に話しかけた。

「ヒュームが紹介したいつちゅーからどんな猛者を連れてきたかと思ったんじゃが…

まさかこんなに可愛い子じゃとは思わなかったの」

「本日はこの連理についてお話が…」

隣に立つ連理の肩に手を添えて、話を切り出す李。

「まあ、立ち話もなんじゃ。長い話になりそうじゃし、どうぞ中へ入りなさい」

「はい。失礼します」

「しつれいします!」

鉄心に促され、客間へ入っていく李と連理。

一子は二人を見送るが、連理が客間へ入る前に一子に目を向けた。

何を思っつかかわからなかった一子だが、とりあえず微笑んで手を振ってみる。

ぎこちなく手を振り返しながら中へ消えていった連理に、一子の脳内で祭りがクライマックスを迎えていた。

.....

Side 一子

午前にやろうと決めた鍛錬も消化して、柔軟をしていたアタシの脳内ではまださっきの祭りの余韻が残っていた。

「あー…連理ちゃん、可愛かったわあ…」

お姉さまがよく女の子に可愛い可愛いって言うてるけど、こーゆーことなのかしら?

だとしたら、アタシも気持ちがよくわかるわあ…(※若干違います)

あの子、雰囲気とか顔とか、あの金髪もそうなんだけどすっごい女の子として可愛いのに、

服装はなんだか男の子みたいにボーイッシュなのよね。

下はハーフパンツで、上はシャツにパーカーだったし。

でも、そのミスマッチ…？っていうのかしら。それがまた愛らしさを際立たせているというか…。

なんだか段々と変な思考になっていくアタシは、そのまま柔軟を続けようとしたけど、途中で客間の襖が開くのが見えてその思考を中断した。

話が終わったのかしら？ってゆーか、そもそも何の話だったんだろう？

あれ、出てきたのルー師範代だわ。いつの間に客間にいたんだろう？

それと連理ちゃんもルー師範代の後が続いて出てきた。

やっぱり可愛…じゃなくて、あれ？そのまま襖がしまっちゃった。

あの李っていうメイドさんもおじいちゃんも出てこないし、まだ話は終わってないのかしら？

ルー師範代はこつちを見ると、手を振りながらアタシを呼ぶ。

「オー！丁度良かったネ！一子、ちよつとこつちに来てネ！」

「はい！」

返事をして傍に行くと、ルー師範代はニコニコしながら要件を伝えてくれる。

…：…ルー師範、いつも笑ってるみたいな顔してるけど。

連理ちゃんは寺院の雰囲気珍しいのか、キョロキョロと周りを見回している。

「実はネ、連理はこれから川神に引っ越してくることになったんだヨ

それと、ここ川神院でも一緒に修行することになるからネ」

「そうなんですか？」

ちよつと驚いた。だって、どう見ても武術をやるようには見えなかったもの。

「まあ、修行と言っても軽く基礎の型を習ったり、精神修養のためだけ

どネ」

なるほど、それくらいなら納得だわ。

連理ちゃんは自分のことを話しているのが気になるのか、さつきからルー師範とアタシの顔をじつと見ている。

「へー。じゃあ、改めて、アタシは川神一子。一子って呼んで！」

これからよろしくね、連理ちゃん！」

「…かずこ…う…：…一子。うん。連理です。…連理って、呼んで」

さつきはあまり喋らなかつたし緊張してたみたいだから、人見知りする子かなって思ったけど、そうでもないみたい。

それに、呼び捨てにされても生意気な感じがしないというか、すんなり認めちゃえるのが不思議。

アタシも連理って呼ぶことにしよう。

「それで、一子は連理に街の案内をしてほしいネ。夕方まで総代と李さんは話をしてるから、今日は一日相手をしてあげてネ」

案内、かあ…。今日一日、よね？

うーん、一日遊ぶだけならアタシでもできるけど、案内もあるとなると、結構難しいわね…。

そうだ！こーゆー時のアタシたちの軍師じゃない！

「大和も呼んでいいですか、ルー師範代？」

「おお、そうだね、直江もついてるなら安心して任せられるヨ！」

良かった。大和なら楽しく、時間も気にして案内してくれそう。早速大和にメールを送る。

納得してくれたルー師範は、連理に向かって説明をする。

「今日は一日一子と一緒に街を見てきてネ。

それと、さつき李さんにもらった財布はあるかい？」

「うん。これ」

連理は手に持っていた財布をルー師範に差し出す。

ルー師範はそれを受け取って、アタシに渡してきた。どういふこと？

「今日のお昼代と、遊ぶお金だよ。余裕があるから、他の友達も誘うといいネ」

「ホントですか？わーい！」

「お財布はできれば直江に渡してネ。使いすぎちゃダメだよ」

そうね、お金についても大和に任せれば安心だね。

その時、丁度大和から電話がかかってきた。

「もしもし、大和？」

『おいワン子：いきなり』川神を案内して”ってどういうことだ？

ちよつと俺には解読不能だったんだが。

記憶喪失にでもなったか？そこまでバカだったのか？』

「ちつがうわよ！今、新しく川神に来た子がいるから、その子の案内を頼まれたのよ。」

それで、大和に手伝ってもらえないかって思って…」

『ああ、そういうことか。安心したわ。さすがに面倒見きれないと思  
い始めてた』

「ちよつと！見捨てないでよ！大和に見捨てられたら誰がアタシに勉  
強教えるのよ！この鬼畜軍師！」

『”おにちく”な、”おにちく”』

「え？あ、そうなの？このおにちく軍師！」

『鬼畜に決まってんだろバカが！』

「ニヤー！！」

イジメられながらもなんとか街の案内については受けてくれた。

うう…ホントにおにち…じゃない、鬼畜だわ…。

「あ、そうだ。ルー師範、大和が来る前にアタシ汗流したいんですけど…」

「そうだネ、連理は見ておくから、シャワー浴びて着替えておいデ」

「はーい！じゃあ連理、ちよつと待っててね！」

「うん」

小さくうなづいたのを見てから、アタシは着替えを取りに部屋へ向  
かった。

Side out

.....

Side 大和

「晴れてるなー。歩いてたらちよつと暑いくらいかもな」

川神院に向かいながら、隣を歩く京に話しかける。

「じゃあ、脱ごうよ。私も一緒に脱いであげるから」

「脱がん。なにが”あげるから”だ」

ついさつきワン子から連絡を受け、新しく引越して来たという女の子に街の案内をすることになった。

なんでも一日相手をするらしく、それなら人数もある程度いたほうがいいだろうと察にいた面子に声を掛けた。

丁度俺の部屋にいた（本当にいつの間にか隣にいた）京は、知らない人間がいることに多少渋ったが無事パーティ加入。

居間でダラダラしていたクリスマスも、人の手助けになるならと即決。

まゆっちは友達を作るチャンスだと話を聞きつけて自分から加入した。

キャップは昨夜夜遅くに帰って来たらしく寝ていたが、メールは入れているので起きたら参加してくるだろう。

源さんはバイトで外出中。でも多分誘ったとしても来なかったと思う。

あとは寮生以外にも声を掛けたが、

姉さんは知り合った女の子とデート中。後で合流するらしい。

ガクトとモロも2人で出かけているらしい。場所は聞いているので近くまで行ったら連絡しよう。

とりあえずファミリーの皆に声を掛けたところで出発した。

「どんな方なんでしょう？…お友達になれるでしょうか…」

『臆するなまゆっちー！どんな奴にだって積極的にアピツちやおうぜえー！』

「引越してきてすぐに川神院に挨拶するということは…武道を嗜んでいるということか？」

俺と京の後ろを歩くクリスとまゆっち（と松風）が話している。

「ワン子の話しぶりからして年下っぽかった。まゆっちもある程度話しやすいんじゃないかな？」

あと、九鬼のメイドに連れられてきたって話だからどつかのお嬢様

の可能性もあるな」

「お嬢様の案内って大変そうだね。相手するのは疲れそう。

帰ったら私が癒してあげるよ、体を使って。だから付き合って」  
「でもそういうところから人脈って広げられるから。お友達で」

他愛無い会話をしながら川神院の門前に到着。

そこにはルー先生ともう一人：

(え、なにあの子。すげえ美少女じゃん)

まさにお人形のような、というんだろうか。

ちよつと吃驚するくらい綺麗な女の子が立っていた。

「オー直江、待ってたヨ」

「こんにちわ、ルー先生。その子が…?」

挨拶をしながら女の子に目を向ける。

すつげー美少女なのに、服装はボーイッシュで庶民的だな。

お嬢様ではなさそう。

「うん、そうだヨ。今日はこの子の案内をしてほしいネ」

ルー先生の話をもう少し詳しく聞こうとしたところで、ワン子の声  
が聞こえてきた。

「お待たせー！あ、大和！皆もきたの？」

「ああ、大和が人数多いほうが良いと言うのでな」

クリスがワン子に対応する。

「そっか、そだね。この子が川神に引っ越して来た、出雲連理ちゃん  
デースー！」

ワン子が女の子、連理ちゃんの後ろに回って両手を肩にかけ、紹介  
を始める。

連理ちゃんは最初は後ろのワン子を見てから、俺たちの顔を一人一  
人確認するように口を開いた。

「えっと、連理です。連理って呼んでください…」

突然知らない人間に、しかも複数人に紹介されたからか、少し緊張  
しながら名前を言う。

少し顔が赤いが、その姿も大変愛らしい。

「これは井上準には会わせられないね…」



隣の京がボソツと呟くが、全くその通りだと思う。

「もしも井上と遭遇してしまった場合、『女神がいる！』とか言っただけこそ犯罪を犯しかねない。」

「万が一にもあのハゲにエンカウントしないことを祈ろう。」

「あ、でもこの子これから川神に住むんだよな…大丈夫かな…。」

「こんにちわ、連理ちゃん。俺は直江大和、大和って呼んでくれ」

「とりあえず少しかがんで挨拶をする。これ以上緊張しないように、近すぎず、遠すぎずの距離で笑いかける。」

「やまと…。うん、大和。連理って、呼んで」

「確認のためか小さく俺の名前を言う。」

「えっと、連理”ちゃん”じゃなくて、連理って呼べばいいのかな？」  
「ん」

「こくつと小さく頷く連理。呼び捨てがいいのか。珍しい反応だな。俺の挨拶が終わり、次はクリスが連理の前に出る。」

「自分はクリスティアーネ・フリードリヒ。クリスと呼んでくれ。」

「自分も連理と呼んだらいいのか？」

「同じように名前を小さく言っただけで頷く連理。」

「ん…連理は可愛いな！」

「クリスは連理のことを気に入ったらしい。ワン子と並んで二人で連理の肩を持つ。」

「初めまして、連理さんとお呼びしますね。私は黛由紀江と言います」  
「年下相手だからだろう、まゆつちが大人な対応をしている。」

「あれ、まゆつち、緊張してないね。いつもなら顔が怖くなるパターンなのに」

「まゆつち〓初対面で緊張、という方程式があるのだろう。ワン子は違和感を感じているようだ。」

「あはは…妹の幼い頃を思い出したからでしょうか。連理さんくらいの方相手ならあまり緊張はしませんね」

「へえ、まゆつち妹いたのか。一人っ子だと思ってた。」

「ゆきえ…」

「そして癖なのだろう、またしても名前を確認している連理。」

『HEY!連坊!そこはフレンドリーに”まゆっち”って呼んでくれなきやダメなんだZE!』

松風が突然話しかける。

「こら、松風。連理さんを怖がらせてはダメですよ」

まゆっちが松風を連理に見せるようにして嗜める。

連理は驚いたのか目を少し見開いたが、すぐに松風が喋っている(設定だという)ことに気が付いたのだろう。

楽しそうに笑う。

「あはっ…まゆっち?」

笑うと可愛い八重歯が見えた。

なんだこの子。何しても可愛いとか反則じゃないか?

「はい、どうかまゆっちと呼んでください」

『オイラは松風ってんだい!よろしくなー連坊!』

「うん。松風」

連理は松風を見て楽しそうに笑っている。

人形劇みたいに思ってるのかな。すげー自然に松風を受け入れる。

「じゃあ、最後は私だね」

京が前に出る。

「京、相手を考えてくれよ…」

小声で『下ネタはやめろよ』と忠告しておく。

京は対人関係引きこもりの排他的な性格だが、『一日相手をするだけ』という今回のような限定的な付き合いなら普通に接する。

しかし、そういう場合は大抵誤解を招くような自己紹介をしたり、隠語を駆使して下ネタを披露したりするので油断ならない。

「大丈夫だよ大和。安心して」

そういつて京は親指をグツと…指の間に挟むな!安心できねえ!

「ま、待て京!さすがにそれは不味い!」

「ジョーダンだよ。さすがに私もこの子相手だと考えるから」

お前の場合冗談じゃないことが多いから焦ってるんだけどな。

「まあ、普通にね…私は椎名京。大和の奥さんです。よろしく」  
「待てコラ」

ガッと京の肩を掴む。

「どうしたの大和？下ネタはしてないよ？事実しか言ってるじゃない」  
「どこが事実か。下ネタじゃないのは感謝するが、いたいけな子供に嘘を刷り込むのはヤメロ」

俺たちがボソボソと会話していると、連理が不思議そうな顔で京を見ている。

「…う…みゃーん？」

どうやら混乱して聞き間違えたらしい。それにしても間違え方可愛いな。

なんか、連理が何か言ったりするたびに新たな可愛さを見つけるな…。

…ハッ!?一瞬ハゲが俺を呼ぶ声があった気がする。危ないな。

Notロリコン、Notロリコン…

「みゃーん、よろしく」

「…なんか、嘘ついたことに罪悪感を感じる…」

ごめんね、改めて、椎名京。よろしく」

連理に嘘つくのは申し訳ないって思うよな。純粹な瞳が眩しいから。

京でさえもそう思うのか。連理すごいな。

「みゃー子？」

「みゃーん」

「…」

「…」

「よろしく、みゃー子」

「うん。それでいいや、よろしく」

…マジですごいな連理。京が押し負けたぞ。

「ウンウン。皆仲良くね。直江、今日はよろしく頼むヨ。」

これ、九鬼から皆のお昼代とか、少しなら遊ぶお金も入ってるから、計画的に使ってネ」

「有難うございます」

ルー先生から財布を貰って、一応中身を確認。

うん、これなら皆合流してもお昼は食べられるかな。

「夕方にはここへ帰ってくるようにネ」

あと、今日は川神から出ないようしてネ」

「わかりました」

時間を確認する。もう少ししたらお昼かな。

その前にガクトたちと合流できたらいいけど。

一応連絡しておくか。飯は商店街でいいか。

「よし、じゃあ商店街へ向かいつつブラブラしようか」

こうして俺たちは、連理のための川神ツアーへ出かけることとなつた

## 第二話 危機とは突如こちらへ迫ってくるものである

S i d e 大和

連理の案内をするために川神院を出発した俺たちは、商店街に向かっていた。

仲見世通りでお菓子や土産物を覗きながらブラブラと歩く。

現在の先頭はワンス子、クリス、そしてその二人に挟まれキョロキョロと辺りを見回す連理。

その後姿を優しく微笑みながら歩くまゆつちと並び、京と俺が歩く。

連理は途中で買ったお菓子の袋を持ち、カリカリと食べながら歩いている。

最初はワンス子とクリスの両者が連理の手を繋いでいたのだが、意外にも好奇心旺盛だった連理は何度も立ち止まり『あれはなに?』と興味を示す。

その類の質問に答えるのは主に俺の役目となり、いつの間にか興味対象が現れた場合、連理は俺の傍へ来るようになった。

その度に手を繋ぎなおす自称・保護者二人だったが、やがて連理が微妙に手を繋ぎたがらないことに気づいたのだろう。

現在では隣で歩きながら常に話しかけるだけに留めている。

これもまた意外だったが、連理はどうやら人見知りしない性格であり、一緒に歩く俺たち全員に対して様々な質問を投げかけてくる。

街の説明役である俺が一番話しかけられてはいるが、案内を除くとほぼ平等に話しかけている。

店の店員にも抵抗なく話しかけていた。

気を使って周囲に話しかけているのではなく、ただ単純に気になったことを問いかけているだけなのだと思う。

俺、ワンス子、クリスには自然に話しかけてくる。

京に対しても、何の間なのかはわからないが若干の沈黙を挟みなが

ら普通に話しかける。

驚いたことに京も、無表情ではあるが別段嫌がったりすることはなく答えている。

真似をしているわけではないだろうが、京と話すときの連理は京と同じく無表情に近い。

しかし度々会話を投げかけていることから、京に対して苦手意識はないようだった。

そのことを京に打ち明けてみる。

「なんか京、連理と仲良くないか？」

お互い表情は硬いつつ、一見つまらなそうにも見えるけどそうじゃないんだろ？」

「うん。なんていうか、波長が合うみたいだね」

「電波かお前らは」

まあ、納得できる話でもある。

好奇心旺盛で人見知りしない、それに表情も豊かな連理だが、はしゃいだりするわけでもなく、割とおとなしい性格だ。

似たような人間といえばキャップだが、彼は好奇心旺盛で人見知りしない、更にじつとしていられない性格である。

反対といえれば反対に属する二人なのだろう。

内向的で人見知りが激しい京とも、対照的な性格と言える。

しかし、そのマイペースさが似ているが故に、京との距離が縮まったのだと思う。

「でも、私より意外な人がいるでしょ」

「……まあ、意外と言えれば意外。納得と言えれば納得だな」

そう言っつて、いつの間にか並んでいる連理とまゆつちを見る。

「ねえ、松風はさつき”つくもがみ””つて言っつた。神様なの？」

『ロンモチだろ連坊〜！』

「なんの神様？馬？」

『”松風””つっつたらかの有名な駿馬だろ〜！その辺の馬と同じだと思っうなYO！』

「しゅんば〜？」

「足がとても速い馬のことですよ」

「松風足速いの？どれくらい？」

『オイラを舐めんなあ！当然の如く一番だ！イ・チ・バ・ン！』  
「あはははっ」

『そこ笑うとこじやNEEEE！ちよつとそこへなおれ連坊！』  
「ムキになってはいけませんよ松風」

正確には、物凄い勢いで仲良くなる連理と”松風”。

連理は松風の存在か、あるいはそのキャラクターがツボに入ったのか、松風と話すときはテンションが一段階上がる。

しかし、松風と仲良くなるということはまゆつちと仲良くなることと同義だ。

「子供への接し方のお手本を見ているようだね」

若干呆れながら京が言う。

確かに傍から見れば、『人形を介して子供の機嫌をとる優しいお姉さんの図』である。

松風との会話を見ているまゆつちが常に微笑んでいるから尚更だ。しかし、普段のまゆつちを知っている俺たちからすれば思わず「あのお姉さん誰？」と言ってしまうような光景だった。

「松風これ食べる？」

『いやオイラ神だから食い物はオウフツ、ブツ、ヤメ、お菓子をグリグリすんない！』

「連理さん、嫌がる人に無理を言っただけじゃありませんよ」

『そうだそうだ〜！神の権限フルに使ってバチを当てるぞ！』

「あははっ、ごめんね松風？」

『ええ子やね。わかりや〜ええんよ』

松風に悪戯をするが、まゆつちに注意されると連理はすぐに謝った。

まゆつちも連理が素直に謝ると、とても嬉しそうに笑う。

「クツ、なんだこれは！？和む場面なのに胸がドキドキする！」

「あく、愛らしさが突き抜けるとそうなるのよ。アタシも今日知ったけど」

「大和、私たちもこんな子供が欲しいね。結婚して?」

「連理みたいな子が可愛いのは同意するがお友達で」

全員で連理の可愛さに悶えているが、ふと周囲を見回してみると、「おい周り見てみる。どうやらあの愛らしさは範囲攻撃らしい」

通行人や店のおばちゃんまでニコニコしながら連理とまゆつち(と松風)を見ていた。

「すごいね。初めて松風が喋って違和感ないと思ったよ」

「俺たちもまだまだ松風を理解しきれてないのかもな」

ファミリーに加入してひと月も経ってないしな。

「やつほくナオツチ。なんかすごい可愛い子がすごい可愛いことしてるじゃない」

近くの店から知り合いが声を掛けてくる。

「ああ、小笠原さんこんにちわ。今あの子のために川神の案内をしている最中でね」

小笠原千花。仲見世通りで菓子店をしている店の娘で、クラスメイトだ。

「へえ。じゃあうちの店も紹介してよ。サービスしてあげるわよ」

悪くない申し出だが、俺は松風と話しながらお菓子を食べる連理を見る。

「うくん…まだこれから昼飯なんだよな。」

今もお菓子食ってるから、お昼食べられなくなっちゃうと可哀想だし…」

「そうね〜金平糖くらいなら大丈夫じゃない?」

「そうだな。…連理ー!」

納得した俺は連理を呼んで手招きをする。

呼ばれた連理はどうしたのかとこちらへ歩いてきた。

「大和?」

どうしたのか?と首を傾げる連理に、小笠原さんも速攻で落ちた。

「か、可愛い!近くで見ると更に可愛いわね!」

「このお姉さんの店で金平糖食べるか?」

すると、途端に目を輝かせる連理。



「金平糖！食べる！」

「あら、金平糖好きなのかしら？」

「そうなのか？」

「好き」

ニコツと笑ってこの発言。

「っ…」

小笠原さんの顔に赤みが差す。

これは破壊力が高い。耐えられるか？

「ズキューーン！」

ワン子は耐えられなかった。心を打ち抜かれたらしい。

ちなみに効果音は口で言ってた。ちよつと今日あいつテンション

おかしくないか？

「うわーなんなのこの子。天使のようだわ…」

ナオツチ大丈夫？誘拐なんてしたらダメよ？」

小笠原さんは真面目に心配してくれる。

「何の心配だ…：…と言いたいところだが、気を付けよう」

自分がロリコンとして軽蔑されかねない発言ではあるが、小笠原さんの気持ちも分かるのでそう言っておく。

彼女も小声で『頑張って』と応援してくれた。

「じゃあ、金平糖食べに行こうか」

気を取り直してそう切り出す。

「は〜い(案内〜)」

小笠原さんも立ち直りが早い。さすが看板娘だ。

その後、金平糖を食べつつ店のお菓子を見て過ごした。

人見知りしない連理が小笠原さんに『これは何のお菓子？』『これはおいしい？』と立て続けに問いかけていた。

小笠原さんも自分の店に興味を持ってくれるのが嬉しかったのか、優しく答えているのが印象的だった。

.....

「おーい大和。やっと見つけたぜ」

「今日は人が多いね」

「大和ー！お前起こしてくれよ！」

昼時になったので駅前の商店街へ向かう。

別行動していたガクトとモロに連絡し、商店街入り口で待ち合わせしていた。

キャップも起きたと連絡があつたので同時に合流。

姉さんはまだ来ないらしい。

「土曜日の昼だからな。外食も多いんだろ

それとキャップは起こしても起きなかつただろう」

「おうよ！昨日の集会の後急にポテト食いたくなつてよ！

ついでに新作のシェイクとかチキンとかも食つてたら遅くなつちまかつたぜ！」

金曜集会が終わってから寮にいないと思つたらそんなこととしてたのか。

「それで？今日案内する金髪美少女ってのはどの子だ？」

ガクトが鼻を伸ばしながら聞いてくる。

こいつのことだ、クリスと同じかそれ以上（ガクト好みのナイスバディ）を想像してるんだらう。

「今ワン子とクリスに囲まれてる女の子がいるだろ」

「やっぱりあの子なんだ。大和の言う通り美少女だね

あの金髪はクリスとはまた違う魅力があるなあ…」

髪フェチであるモロが食いついてきた。確かにあの髪は連理のトレードマークと言つていいだらう。

「なんだガキかよ…」

いや確かに可愛いとは思うけどよ、あれに反応する奴なんざ井上くらいだろ。

「つか確実に狙われるぞ」

年上好きのガクトはテンションが下がった。

連理にとつては幸運だと思う。

そしてやはり井上準の存在はガクトであつても無視できないらしい。

「まずは合流組の自己紹介だな！」

モモ先輩はいねえけどファミリー全員集合！」

キャップの声にファミリーが集まる。連理は突然現れた男三人組を不思議そうに見ている。

「連理、この三人は俺たちの友達だ。今から一緒に川神を案内するよ」  
人見知りしないことはわかったので大丈夫だとは思うが、緊張しないように先手を打つ。

「まずはオレ！風間翔一だ！」

趣味は冒険！やりたいことをやりたい時にやるのがモットーだぜ  
！」

「しよーいち？」

「今日一日俺たちと遊ぶんだろ？それなら風間ファミリー特別会員にしてやるぜ！」

俺のことはキャップと呼んでくれ！」

「わかった、キャップ。」

出雲連理です。連理って呼んで」

「おうよ！よろしくな連理！」

さすが、連理のような美少女を前にブレないな、キャップは。

「俺様は島津岳人だ。ナイスなマツスルガイだぜ。」

…ところで連理はお姉さんとかいるか？いたら紹介してくれ！」

最低の自己紹介だが、ガクトらしいっちゃらしい。

「お姉さん？いないよ？」

「連理、律儀に答えなくていいからな…」

いたとしても紹介させないけどな。

「じゃあ僕の番だね。」

師岡卓也。モロでいいよ、連理ちゃん」

モロが微妙に目をそらしながら言う。

モロ：美少女とはいえ子供相手なんだから…

まあ最後に名前を呼ぶくらいはできてるからいいけど。

「モロ、連理って呼んで」

「あはは…わかったよ。よろしく、連理」

京の時もそうだけど、連理は「人見知り」という壁をぶち破ってく

るな。

まあ良いことだから気にしないけど。

「よし、自己紹介も終わったし、軍師大和！これからどうする？」

「そうだな、もうお昼だからそのファミレスにでも入るか。飯食いながらどこ行くか決めよう」

そう提案するが、異論を唱えたのはクリスだ。

「ちよつと待て大和。せっかくの川神案内なのにファミレスなのか？」

もつと美味しくて良い店のほうが良くないか？」

まあ、普通の案内ならそのほうが良いと思う。でもな…

「そうなんだけども、連理ぐらいの子だったらファミレスのほうが好きなもの沢山あるだろ。

それにさつきお菓子食ってたし、凝ったもの出されても食いきれないと思う」

「ム…それもそうか…。よし、そういうことなら自分も賛成だ」

旅行の後からクリスは俺の意見もしっかり聞いてくれるようになった。

あの対決も無駄にならなくて良かった良かった。

「他に案がなければファミレスだな。皆はいいか？」

そう聞いた途端、まゆつちが連理の近くに移動して辺りを見回す。

まるで警戒しているかのような…

「どうしたまゆつち？」

聞いてみると、警戒を続けながらまゆつちが答える。

「いえ、なんだか禍々しい気がこちらへ向かっているので…」

「なんだと!?!どっちからだ!?!」

クリスが叫んで、同時にワン子と京も警戒し始める。

「…っ！あちらです!!」

まゆつちが指し示す方向へ出て警戒を強める武士娘たち。

俺たちも身構えながらその方向を見ると…

「うおおおおおおおおお!!!」

こつちに向かつて全力で走ってくる見覚えのあるハゲが…

「あいつは！井上準!!」

隣のクラスのロリコンだった。

井上の視線は明らかから俺たち…いや、俺たちの中心にいる一人だ。

「クソツ、連理の存在を嗅ぎ付けたか！まゆっちは連理を守ってくれ！」

「はい！」

『連坊はオラたちに任せろお!』

「クリ！京！迎撃するわよ！」

「了解だ！」

「しよーもない…フツ！」

京は呆れながら、足元にあった小石を拾って迫りくるハゲに勢いよく投げる。

弓使いの京だが、最近では体術やスリングショット（パチンコ）、素手による投擲も身に着けていた。

京の投げた小石は見事、井上の額に強打を与えるが…

「ツ!?弾かれた！勢いが止まらない！」

まさに重機関車。その姿はまるでどこかのフリーカメラマンのようだった。

…フラッシュも使えるしな。

「ってそんなこと考えてる場合か！ワン子！クリス！急所を狙え！」

「合点！」

「任せろ！」

最早接近戦の間合いに迫ろうとしていた井上に、二人が瞬時に構える。

「うおおおおおおおおおおおおお」セイツ！「うぐっ」やあ！「ぐはっ!」  
クリスが井上の鳩尾に鋭い蹴りを放つと、それまでの勢いも合わさって重機関車もさすがに怯んだ。

そこへワン子のアッパーが顎に叩き込まれ、崩れるようにハゲが沈黙した。

「でかしたぞお！ワン子、クリス！」

「つたくどうしようもねえハゲだな」

後詰として二人の後ろにいたキャップとガクトが言う。

「こいつはどこから来たんだ？」

「明らかに商店街の向こうから走ってきてたよねえ…」

本能で察知して暴走でもしたのかな」

「どんだけなんだコイツ。」

とりあえず沈黙している井上をどうかしたいが、こいつがいるってことは…

「ハゲはっけーん！」

「おや、見知った顔ぶれですね」

やはり現れたのは葵冬馬と榊原小雪。いつもの三人組だ。

「おい葵冬馬。お前のところのハゲがうちの客を襲いかけたぞ」

「すみません。歩いていたら突然『女神の気配がする！』と言って走り出したもので」

「ビックリするくらい速かったのだ」

俺が危惧したことそのままじゃねえか。

詳しくは前話参照で。

「はっ!?倒れている場合じゃないとロリコニアの民が言っている！」

ハゲが起きた。犯罪臭漂うその国は早く解体したほうが良い。

「準、あなたいつも言っている”イエスロリコン・ノータツチ”はどうしたんですか」

「若、すまねえ。だが俺はもう自分を止める自信がない！」

井上が勢いよく立ち上がり、連理のほうを見る。

そこには既に、連理と話す榊原小雪がいた。

「連理ってどういうの？じゃあレンレンだね！」

ボクのごときはユキって呼んでいいよ！ましゅまる食べる？」

「ユキ、ありがとう。金平糖あげる」

「ウェーイー！」

ましゅまると金平糖を交換する二人。

まゆつちとの会話に引けを取らない和み空間だ。

「珍しいですね。ユキが自分から仲良くなつていくなんて」

「おおお…、神よ…貴方は何故こんなにも罪深い存在を創り給うたのだ…」

井上は涙を流して感動している。軽くキャラ崩壊まで起こしてるぞ。

「俺は井上準と言います！あなたの名前を教えてください!! 一生のお願いー!」

「ここで使うんだ…一生のお願い…」

ワン子が驚愕していた。

「出雲連理です」

やはりというか、素直に答える連理。

「連理ちゃんか…素晴らしい名前だ…」

これが…恋か…

井上はもうそのまま天寿を全うするんじゃないかってくらい穏やかな表情をしている。

「連理って呼んで」

「!?!?!…そそそそそんなこと許されるのか…!?!」

ドモリすぎだろ。

しかしなんで”ちゃん”は嫌がるんだろ。

「レンレン恥ずかしいの?」

榊原がなんとなく聞くと、連理は顔を赤らめながら頷いた。

「はうあつ!?!」「ほあつ!?!」

その表情に崩れ落ちるロリコンと、なぜかワン子。

…ワン子大丈夫か? 連理と会って変な扉開いたんじゃないだろうな?

どうなつてんだ川神姉妹は。

その後、なんとか行動を共にしようとするハゲを榊原小雪が(物理的に)沈めて、引きずりながら葵冬馬と人ごみに消えた。

俺たちは三人を見送って、体力と精神力を回復するためにファミレスへ入った。

.....

「あ、姉さん合流できるって」

ファミレスでチャーハンセットを黙々と食べる連理を見て精神力を回復した俺たちは、イタリア通りを練り歩いていた。

カラフルな建物に目を輝かせていた連理は、携帯を開いた俺に尋ねる。

「姉さん？」

「うん。学校の先輩だけどね」

ただの舎弟である俺の立場を説明しても混乱させるだけだと思い、簡単に告げる。

すると連理は何を思ったのかガクトの元へ駆け寄った。

「ガクト、大和お姉さんいるって。紹介」

おそらく自己紹介のガクトのセリフを思い出したのだろう。良い子だ。

「あゝ連理。モモ先輩のことは俺様も知ってる。だから紹介してもらわなくても…

いや待てよ？連理から俺様のいいところを伝えてもらえば……

連理！これから会う先輩に俺様のいいところを沢山言ってくれ！」

ガクトはやはり最低だった。

今更姉さんにガクトのことを伝えても無駄だろうに。

「しよーもない……」

京も同じことを思ったのだろう。

「街は大体案内できたし、どうするキャップ？河原にでも行くか？」

『川神から出ないように』とされているので、七浜に行くこともできない。

後は自由に遊ぶ時間にしたほうが良いだろう。

「ようしー！それじゃ河原でモモ先輩と合流して皆で遊ぼうぜ！」

キャップの一言で進行方向を決めた俺たちは、姉さんと合流するために歩き出した。

——この時、俺たちは知らなかった。連理が抱える“もの”の大き



さを。

それどころか、連理が何かを抱えているなんて、思いもしなかったんだ。

出雲連理

俺たちにとって小さくない出会いは、まだ始まったばかりだ。

### 第三話 連理の”お願い”

川神百代は常に退屈であった。

己が『武神』と呼ばれるほど強くなったことは自覚しているし、嬉しいことでもある。

しかし、己が強くなればなるほど、周囲との差が開く一方であり、自らの強敵やライバルと言える存在は遂にいらなくなってしまった。

結果、強くなった百代が手にしたのは常に身に纏う『退屈』と、並ぶもの無しという『孤独』であった。

彼女を指導する人間は口をそろえて言う。

『心の成長が足りていない』

『精神修行の必要がある』

頭ごなしに言われて理解するにはまだ若く、年頃の娘である百代には納得のいかない話であった。

意識したことではないが、百代は鍛錬に身が入らぬようになり、『退屈』から生まれる戦闘衝動を日々募らせることになる。

その衝動は毎朝のように現れる挑戦者や不良たちのような有象無象では到底満たすことができるものではなかった。

抑えられない衝動を鎮めるため、また不安定になりがちな自分の精神を保つため、百代は二種類の鎮静剤を用意した。

一つ目は、恋愛。

思春期の最中にも関わらず、百代は己の強さのせいで世の男に興味をなくしていき、自らが男役となることで女性を相手に疑似恋愛をすることが多くなった。

二つ目は、友愛。

幼いころからの付き合いである風間ファミリーとの交流が、日々の退屈を紛らわせるための良薬となった。

百代よりも年下の連中ではあったが、百代の強さに敬遠するでもなく、まして百代の強さに媚び諂う訳でもなく、付き合いの長さからくる確かな信頼関係があった。

彼らと過ごす時間は、彼女にとってかけがえのないものであった。

現在の百代はこの二つの鎮静剤により戦闘衝動をかるうじて抑えているに過ぎず、一歩間違えればその衝動が彼女の人格を歪めてしまう危険性に苛まれていた。

故に衝動に駆られてなのか、はたまた本能的に衝動の危険性を察し吐き出そうとしているのかは定かではないが、百代は常に対戦者を求めていた。

九鬼揚羽や鉄乙女といった強敵が多忙によりむやみに戦うことが叶わなくなつた今、黛由紀江では百代相手は荷が重い。二年の経験値の差はそれほどまでに大きい。

かといって川神鉄心や師範代などの実力者相手では、歳が離れすぎていて面白みがない。

百代が欲していたのは唯の強敵ではなく、「ライバル」足り得る存在なのだ。

それこそ、欲求の籠たがが外れてしまいそうになるほどに。  
.....

今日も街でナンパした大学生だという女性二人と昼過ぎまで遊んでいた百代。

午前中には「弟」と呼ぶ舎弟の大和から、新しく引越して来たという少女に川神案内をするから来ないか？という旨のメールが届いたが、目の前にいる女性二人の昼食を奢ってくれるという申し出を見逃すわけにはいかなかった。

結局デザートまで奢ってもらい、満足した百代は二人に別れを告げて大和に連絡することにした。

既に百代以外のファミリーは集合しているらしく、百代が向かうべき場所と目的の書かれた返信が届いた。

「今から河原で遊ぶ？案内はもう終わったのか。随分早いな」

この時まだ連理を知らない百代からすれば、案内の進行役を務めたであろう弟にしては随分シンプルだと感じた。

「まあいいか。河原の方向はくこっちだ！」

そう言って強く地面を蹴ると、百代は建物を飛び越え彼方へジャンプした。

”川神では時折、人が空を飛んでいる”  
そんな話があるのは、百代などの”壁を越えた実力者”がこのように特大ジャンプで移動するか、狼藉者を吹き飛ばすためである。

——十分後。

「遅いぞお前らー」

ジャンプで移動した百代に移動時間など無いに等しい。

見事に待ち惚けをくらっていた。

「あれ？姉さんはやいね。いつからいたの？」

「十分くらい前だ」

「メールしてすぐじゃん」

「飛んできたからな」

ああそう…と呆れながら笑う大和だったが、すぐに気を取り直して後ろを歩いていた連理を招く。

「お!?まくたとんでもなく可愛い子連れてきたなあ」

百代は連理を見てすぐに上機嫌になった。彼女の女好きは岳人に並ぶほどである。

「連理。こちら川神百代さん」

「…?大和のお姉さんは？」

大和の姉が来るものだと思っていたのだろう。連理が不思議そうに尋ねる。

「あーっと、この人だよ。本当の姉きょうだいじゃないけど、俺は姉さんって呼んでる」

勘違いをさせてしまったかと、苦笑いしながら大和が説明する。

「ふーん。わかった。」

…出雲連理です。連理って呼んで」

「うーん可愛いなあ連理は！私は川神百代。モモちゃんでもモモ先輩でもお姉ちゃんでもいいぞ」

「じゃあ、モモちゃん」

笑いながらほぼ迷いなく答える連理に、またも百代の機嫌は良く

なった。

「お姉ちゃんも捨てがたいが、モモちゃんと呼ばれるのもまた気分がいいな〜」

上機嫌な百代に、連理が突拍子もないことを言い始めた。

「ガクトは背が高いね」

「おや?と思ったのは百代だけではない。

近くにいた大和も、成り行きをなんとなく見ていた京も頭に疑問符を浮かべる。

「ん、んー?連理は突然何を言い出すのかな?」

百代は何とか連理の意図を察しようと会話を続けた。

「ガクトは背が高くて、体が大きいね」

何故か突然岳人を褒め始める連理。

その意図に最初に気づいたのはやはり軍師大和であった。

「あーもしかして連理、さっきのガクトのお願いを……?」

思えば、『モモ先輩に自分の良いところを言ってくれ』と話していた。

「大和?それはどういうことだ?」

「えー……つと……」

獰猛な笑みを浮かべる百代に、大和が数瞬事情説明を躊躇すると、代わりに連理が説明を引き継いだ。

「ガクトにね、モモちゃんに良いところたくさん言ってくれてお願いされた」

「連理さーん!?それは別に伝えなくていいんだよー!」

あつさりと、何の悪意もなく裏切られた岳人は驚愕していた。

「しかも連理から見たガクトの良いところって”背が高い”ぐらいしかないんだね……」

「あれだけ頑張つて伝えようとしてそれだけだもんなあ……」

「来る途中ずっと考えてたのかな」

「あまりにも、酷い……」

「なんかアタシ涙出てきそう……」

連理の述べた”長所とは言えない長所”に、現実是非情だと思い知

らされた。

「ほお〜…こんな純粹な子供を利用するとはなあ…ガ・ク・トお〜」  
そう告げる百代に、岳人は命の危機を感じた。

「まあ、ガクトは後で沈めるとして……」

連理は正直者だなく」

連理を褒めながら、百代がいつも一子にそうするように、頭を撫でるために手を伸ばす。

「……………」

その手が不意に止まった。

まるで時間が停止したかのように動かない百代に、一番近くで見ていた大和が首を傾げる。

「姉さん、どうしたの？」

大和の声に他のファミリーも異変に気づき、百代と連理に注目する。

しかし百代に大和の声は聞こえていなかった。

（なんだこの子…この気…あまりにも自然だったから気付けなかった…）

誰しもが持っている、纏っている”気”。

連理も大和や卓也と同じように、一般的な人間の気を体に纏っているように見えた。

しかし百代には感じられた。

武芸を嗜んでいる気を感じることが出来る者の中でも、さらに限られた実力者でなければ気付くことができなかったであろう”違和感”。

（強制的に抑え込まれているのか…？何かの術…？）

竜封穴か…？いや、違う。これは強制じゃない…）

川神流に伝わる”竜封穴”。

己の力と引き換えに相手の気を使用不可能にする技だが、百代の感じたそれは強制的に封じられたものではないと理解できた。

（まさか自分で押し込んでいるのか？気が溢れ出ないように…）

よくよく見ればかなり強力に抑え込んでいる…。

まゆまゆも気付かないくらいだ。もしかして一日中これが続いているのか!?)

百代はあまりしないが、実力者であれば体外へ溢れ出る気の量を調節することはできる。

蛇口のように気孔を閉じれば良い。そうすることで、あたかも一般人であるかのように偽ることは可能だ。

しかし連理のやっていることはそれとは異なる。

自らの気を使い、力で気を抑え込んでいるのだ。

蛇口での調整ではない。蛇口は常に全開。しかし指で無理やり水が出ないよう押さえ続けるようなものだ。

(体力が持つわけがない…が、それを連理はやっている!)

しかも一般人だと思われるよう調節して…!)

百代は笑っていた。好戦的なその笑いを、大和は何度も見たことがあった。

(姉さんのあの表情は…「獲物」を見つけた時の顔だ…!)

まさか、と大和は思った。

今百代と対峙しているのは、先ほどまで無邪気に笑っていた連理ことどもなのだ。

「姉さん…?」

先程と同じように問いかける。

しかしまたしても大和の声は無視された。

「まゆまゆ…連理の気を注意して感じてみたか…?」

昂りを抑えるように、絞り出したような声で百代が言う。

「えっ、えっ…いえ…っ!」

最初こそ戸惑った由紀江だが、言われたように連理の気を感じてみると違和感に気付いた。

「どうしたの?まゆっち?」

由紀江の様子を見ていた一子が、様子が変わった彼女を見て首を傾げていた。

「連理さんは…膨大な量の気を、ご自身の気で押さえつけているようですよ」

由紀江のシンプルで、しかし曖昧な説明にクリスが疑問を唱える。  
「膨大な量……？自分は何も感じないぞ？」

「連理さんが押さえつけているからですよ。やり方は無茶苦茶ですが、気配を消すようなものです」

「俺様まだわかんねえんだが……つまりどういうことだ？」

岳人の問いには百代が答えた。

「押さえつけてるからどれくらいなのかはわからんが……というか、想像もできん。」

だが一つ言えるのは……連理の気は少なくとも私の3倍以上だということだ」

百代の発言に、ファミリー全員が驚愕した。

百代の強さを知っているからこそその驚愕だった。

「お姉さまの、3倍……？」

「連理が……じよ、冗談でしょ!？」

一子はまだ理解が理解が追い付いていないのか、事実を繰り返すことしかできなかつた。

卓也は普段からファミリーで最も百代の強さを信じて疑わなかつたことから、否定を求めて視線を彷徨わせる。

京は声も出ない、というようだった。

「モロ、姉さんはこういう事で嘘を言ったりしない。知ってるだろ？」

「で、でもっ!」

「大和の言う通りだモロロ。しかも3倍という数字も当てにならん。」

もつと多い可能性のほうが大きいくらいだ」

「そんな……」

シヨックを受ける卓也だが、気持ちは全員同じであった。

更に言葉が続けられたのは、比較的冷静だった大和、クリス、由紀江、そして翔一だけだった。

「それで？結局連理はモモ先輩より強いのか？」

このような場面で物怖じしない翔一はさすがであった。

「さあな。それを今から確かめてみるのさ」

百代が拳を握る。



「姉さん、連理と戦うのか？」

「いくらなんでも…相手は連理だぞ?!」

クリスが憤る。連理の見た目から武術を学んでいるとは思えず、このままでは不味いと感じたのだろう。

”気” っていうのは精神力の強さを表す。つまり”気が多い” っていうのはそれだけで能力が高いことを示してるんだよ”

最早止める気がない百代は、止めようと思っている大和やクリスにそう解説し、連理に向かって告げる。

「なあ連理。私と戦ってくれないか？」

連理の実力が見えない現状、大和やクリスにとっては連理に対する死刑宣告のように聞こえた。

「クソッ、連理！連理は姉さんと戦いたいのか!？」

今まで傍観者のように立っているだけだった連理は、そこで初めて百代が自分に戦意を向けていることに気付いたといった表情だった。

しかし、事態を理解すると、毅然とした態度で百代に言い放つ。

「駄目。」

今日一日で初めて見せる表情だった。

百代に対する怯えはない。不安も見られない。しかし戦うことは拒否する。

戦いに飢えた『武神』が、それで諦めるわけがなかった。

「そんなこと言うなよ。ちよつと遊ぶだけでいいんだ」

しかし連理は首を振る。ゆつくりと、相手に理解を求めるように。

「戦つちや駄目って、言われてる」

「誰に?」

「おじさん。先生みたいなひと」

「おじさん…? お前に気の使い方を教えたのもその”おじさん”か?」

連理は頷く。

連理の言うことから察するに、連理に気の使い方を教えたその『おじさん』が、戦うことを禁じているらしい。

『なんと勿体ないことを』と、百代はその人物を内心で酷く批判した。

(この気の量：間違いなく強いのに、なんでソイツは戦うことを禁止したんだ？)

バカじゃないのか？たとえ模擬戦でも、実戦で得られるものは多いだろうに…)

百代の思考は、その『おじさん』の批判から、段々と連理の戦う姿を想像することへ変わっていった。

(さっきから私の拳と足を警戒してる…目も良い。

自然体でいつでも避けられるように…これは型じゃないな…天然か…)

百代の想像の中で戦う連理は、やがて抑え込んでいた欲求を湧きあがらせる。

(戦いたい…強いのか？強いんだろうなさつきから少しも警戒を解かない戦いたいでも体は出来上がってないし無茶をさせる訳にもいかないけど戦いたい手加減しながらいやそれだと我慢できなくなるとうやったらこいつの本気が見られるのか戦いたい一発だけでも戦いたい我慢できるだろうかそうだこれからいくらでも機会はあるはず戦いたい一発だけで今日は…)

(よし、一発だけ。一発だけ様子見で)

己の理性を限界まで活用し、目の前の小さな存在を潰してしまわないように。

力試し。実力を見るため。

そんな言い訳を何度も自分に言い聞かせる。

「わかった。今日は諦めよう」

今の今まで尋常ならざる気配を見せていた百代が折れたことに安堵を浮かべるファミリーの面々。

しかし、直後の百代と連理、両者の行動が、彼らを再び驚愕させることになる。

「この一発だけで我慢してやる…っ！」

突如放たれた百代の拳。

見えていたのは弓使いである京と、確かな実力を持つ由紀江、拳を放った百代自身。

そして放たれた側である連理だった。

京は拳こそ見えていたが、連理が反応できるなど露程も思わず、しかし体のほうが動いてくれなかった。

由紀江は、拳が放たれた瞬間に反応し、助けに入ろうと考えた。

しかし連理の目がしつかりと拳を見据えているのに気が付き安心してしまい、動くことはなかった。

百代は、もしも連理が見えていなかったら寸止めをするつもりでいた。

だからこそ、連理が拳に反応していることが嬉しくなり、そのまま振り抜いたのだ。

そう、百代は振り抜いた瞬間にこう考えた。

『何故、自分の拳に感触が残っているのか？』

直後、ファミリーの後ろから土の上で何かを引きずるような音が聞こえた。

一瞬遅れて連理が襲われたことに気付いた面々だが、百代の目の前に連理が立っていないことを確認し、まさかと思つて音のしたほうへ目を向ける。

数メートル先に、小さな体が横たわっていた。

「っ、連理……？」

大和が倒れたまま動かない連理の名を呟く。

「モモ先輩！いくらなんでもやりすぎだ！」

「そ、そうだよ！気が多いとか言つたつて、やっぱりまだ小さいんだし……！」

クリスに続き、卓也までもが百代を責める。

だが、そんなものは聞こえてないとはかりに、百代が口を開いた。

「まゆまゆ…っ、まゆまゆ！見てたか!？」

突然慌てだした百代に、責めていたクリスも勢いを緩めてしまう。

「まゆつち…う？二人は何を見たというのだ？」

百代の視線は変わらずに動かない連理を見ていた。

由紀江は信じられないものを見たという顔で、固まりながらも語り始めた。

その体は、少し震えているように見える。

「れ…連理さんは、しつかりと反応していました…」

反応？と周囲が首を傾げる。

「連理さん、見えてたんです。モモ先輩の拳…」

あ、あの反応なら、避けられたはずなんです。

だからモモ先輩は拳を振り抜いて、私も、助けに入らなかったです…」

「どういうことだ？避けられたのに、避けなかったのか？」

「それだけじゃない…」

震える声で、百代が続けた。

「連理…あいつ、力を抜いて、拳のほうに向かってきたんだ…」

まるで、最大値でダメージを受けるため、みたいに…」

『はあ？』

「こんどこそファミリーから言葉による驚きが表された。

「なんだってあいつはそんなことを？」

「私を知るわけないだろう！」

「っ！おい！連理が起きる！」

今までじつと連理を見ていた大和が叫ぶ。

連理は上半身をムクリと起こすと、ファミリーへ、否、百代へ顔を向けた。

傷一つないその顔に笑顔を張り付けて。

その表情は、確かに今まで川神を案内してきた連理のものだった。無邪気で、楽しそうな、嬉しそうな笑顔だった。

しかしこんな場面だからこそ、その笑顔には恐怖を感じる。

何故こんなにも感じる印象が異なるのか。

何故その笑顔から狂気が感じられるのか。

わからない。理解できないが、連理が普通の状態でないことは一目瞭然だった。

連理は立ち上がると、百代を正面に捉えた。

「ヤバいぞ……みんな離れろー」

百代が叫ぶ。

その瞬間、一直線に連理が走り出す。

その細い脚からは考えられない速さ。

そして自身の混乱もあって、百代は簡単に連理の体当たりを受けてしまう。

「なっ、ぐあああっ!!」

予想以上、考えたよりも遥かに力強い連理の体当たり。

反応できなかったとしても、吹き飛ばされるとは思いもしなかった。

ここ数年で忘れかけていた地面に引きずられる感触。

全てが予想外であった。

クソツ、と悪態をつく暇もない。既に連理は百代に近づいていた。

自身の腹部に感じる体重。すぐ目の前には、先程と変わらない笑顔の連理。

狂気を宿した大きな瞳が、よく見えた。

マウントポジション。

先の力を見ると絶望的とも言える構図。

連理の攻撃を唯受け続けるしかないと思い、両手で防御の態勢を取った。

「……………？」

しかし連理の攻撃が来ることはなかった。

身構えてから数瞬だ。時間にして3秒も経っていない。

しかし異常を感じるには十分だった。

「攻撃、しないの？」

不意に投げかけられた問い。

その声の抑揚は、戸惑いを表していた。

「連理…？」

防御を解いて、連理の顔を覗く。

悲しそうな、辛そうな表情。

迷子のような、と百代は思った。

「攻撃、してよ…さつきみたいに…」

震える声で連理が願う。

けれども百代には、もう欲求はなかった。

今にも泣き出しそうな連理に戸惑うばかりだった。

「連理、ごめんな…私にはもう、お前と戦う理由がなくなってしまう」

正直に言う。自分から仕掛けておいてとも思う。

しかし、百代はもうあんな連理を見たくなかった。

「ねえ、戦おうよ。攻撃してよ。お願いだから…」

——おねがいだから、ころしてほしい

言葉に詰まった。

連理の表情を正面から見つめ、それが本気であることを知った。

その”お願い”を引き出してしまったのが自分だと、百代はすぐに理解した。

同時に、なんて愚かなことをしてしまったのだろうと後悔もした。

戦うことを後悔したのは初めてであったが、そんなこと今は些細なことであった。

『おじさん』はこうなることがわかっていたのだ。だから戦うことを禁じた。

連理も彼の言う事を守るため、百代との勝負を断った。

それを百代が台無しにしてしまったのだ。

百代が拳を入れたことで、連理の”スイッチ”が入ってしまった。

もしもこの願いが連理の心からの願いだとすれば、吹き飛ばしてし

まった時の、起き上がって見せたあの表情も説明がつく。  
連理は思ったのだ。

『この人なら自分を殺してくれるかもしれない』と  
単なる自殺願望ではない。

百代の拳を全くの防御無しで受けて傷つかない連理の顔。

おそらく気の強さが連理を守っているのだ。

並大抵の相手では傷つけられない。

傷つくことが出来ない。

だから、ずっと待っている。

”死”が向こうからやってくるのを

連理の過去に何があったのかは知らない。

どうしてこの子がこんなにも重いものを背負っているのかなど、考  
えもつかない。

けれども、今自分が出来ることと言えば、

たとえ手遅れであっても、正直に、真直ぐに連理と向き合うことだ  
けだと、そう思った。

百代の上に乗っていた連理を優しくどかし、上半身を起こす。

思いつめたような表情をする連理の肩をしっかりと掴み、目を見て  
話す。

「連理、謝って許してもらえるかわからないけど、

本当にごめん。ごめんな……？でも……」

連理が自分の目を見て、話を聞いていることを確認して、続きを言  
う。

「私は連理を殺せない。殺したくない。

私は、連理にまだ生きていてほしいよ」  
「……………」

連理は何も言わなかったが、いつの間にか瞳から狂気は薄れ、代わ  
りに大粒の涙があふれ出した。

次第に嗚咽も混ざり始め、悲しげな声が聞こえてくる。

「…っ、…っぐ、お母さん、お父さん…っヒック」

泣きながらの呟きに、思わず百代は連理を抱きしめた。

「ごめんっ。連理、私が莫迦だった！」

ぎつく抱きしめられた連理はとうとう我慢できずに本格的に泣き始める。

「うあ、会いたい…よおお…、うあああ…」

おそらく、先程の『殺してほしい』の裏にある、連理の本当の願い。それを聞きながら、百代は謝り続ける。

「ごめんな、…ごめん……」

遠巻きに百代と連理を見守っていたファミリーの仲間にも、連理が悲しんでいることは痛いほど伝わって来た。

皆一様に、悲痛な面持ちで二人を見守り続ける。

河原に響く連理の泣き声が、いつまでも耳に残っていた。



## 第四話 この世界で生きるために

S i d e 百代

あれからしばらく連理は泣き続け、私はその間ずっと抱きしめていた。

連理は見た目よりもさらに幼い子供のように見えた。抱きしめながらずっと後悔し続けていた。

何故私はあんな愚かなことをしてしまったんだろう？

相手の事情なんてお構いなしに、自分だけの都合で考えて、欲求を満たすことで頭が一杯だった。

今まではまだこんな無茶はしなかった。

まゆまゆにだつて無理矢理迫るようなことは無かった筈だ。

それがいとも簡単に自分が抑えられなくなり、私は最低の事をしでかした。

こんなの辻斬りや通り魔じゃないか。

武人のすることじゃない。

私は自分を責めながら、連理に謝り続けた。いや、謝ることしか出来なかった。

暫くすると連理は泣き止んでくれた。

私と連理はゆっくりと立ち上がる。

泣き止んだというか、ある程度落ち着いたというか…

まだ涙は出ているし、顔は下を向いてしまっている。

その姿に私の心にズキズキと痛みが走る。

様子を伺っていた大和たちも近づいてきた。

当然全員から叱られた。

「姉さん、今回ばかりは…」

「お姉さま…」

普段、私を立ててくれる弟と妹も流石に怒っていた。当然だ。

「ああ、皆もすまなかった。これは全面的に私が悪い」  
素直に受け入れて頭を下げる。

皆は私が謝罪したことに驚いたのか、戸惑ってしまったようだ。

「まあ、モモ先輩が悪いと思ってるならこれでチャラだ！」

「そうだね、これからはこんなことしないようにね」

キヤップと京なんかはもう許してくれるようだ。

だが、クリスは流石、儀を重んじるだけあってまだ許せないようだ。

「クリス、気持ちはわかるがあまり引きずるなよ？」

俺もまだ少し怒ってるが、それも連理が姉さんの謝罪を受け入れるまでと決めた」

大和はクリスがこれ以上怒ることがないように気を使ってくれた。本当に出来た弟だ。

でも多分、本心なんだと思う。

「ム…そうだな。連理が許すなら自分も納得しよう」

クリスは大和の案を落としどころにしてくれた。コイツも段々角が取れてきているようだ。

「ありがとう、お前等…」

仲間たちの気遣いを感じて、もう一度しっかりと頭を下げた。

「それじゃ、一度川神院に戻ろう。連理ももう少し落ち着いたらほうが話しやすいだろう」

大和の提案に反対する奴はいなかった。

Side out

.....

Side 大和

川神院に戻ると、門の前に学長と無表情なメイドが立っていた。

九鬼のメイドか。ワン子が李さんだと名前を教えてくださいました。

「流石にジジイは気づいてたか。まあ、あれだけ気を放ちながら戦ったんだ。当然か」

姉さんがばつが悪そうに呟いた。

連理はワン子とまゆつちに挟まれて俯きながら歩いていたが、李さんを目の前にするるとよろよろと前に出た。

「李い…」

連理はそのまま李さんにしがみつき、震えていた。泣くのを我慢す

る幼い子供のようだった。

李さんは連理をあやすように、優しく微笑みながら背中を軽く叩いた。

さつきまでの無表情が嘘のような優しい顔だった。

「モモ…お前自分がなにをしたかわかっておるかの…」

『…っ!!』

学長が姉さんを睨み付ける。それだけなのに息が詰まりそうだった。

学長が本気で怒っているのを初めて見た。

俺たち全員が動けなくなってしまった。

しかし姉さんだけは前に出て、学長と李さんの正面に対峙した。

「ああ…自分がどれだけ莫迦だったか、思い知ったよ」

後ろからでは顔は見えない。

でも姉さんの声は悔しそうに震えていた。

そして姉さんは李さんの顔を見て、勢いよく頭を下げた。

「すみませんでした…!!」

李さんは少し驚いた後、口を開く。

「何があったのか、教えて頂けますか？」

姉さんは頭を下げたまま語る。

自分が連理の特殊さに気付いたこと。

勝負を挑んで断られたこと。

我慢できずに殴ってしまったこと。

連理に押し倒され、泣かせてしまったこと。

一切の言い訳をせず、ただ事実だけを語った。

「わかりました…。では、連理の”願い”も聞いたのですね？」

連理の願い…。

俺たちにも聞こえてきた、連理と姉さんの会話。

そして連理の泣き声。

『ころしてほしい』と、『お父さん、お母さん』の悲痛な叫び。

この二つが同じ願いだとすれば、連理の両親は…

「はい。聞いてしまいました」

「そうですか…。では、簡単にですが、連理についてご説明します。鉄心様、彼らのお時間を戴いても？」

「そうじゃの。外で話すことではない。皆、入りなさい」

学長はそう言って川神院に入っっていった。

「私は少し連絡を取る必要があるので、先に向かつてください」

連理にしがみつかれたままの李さんは、携帯端末を取り出しながら俺たちを促した。

俺たちが川神院の客間に通され、無言で待っていると、李さんと学長が入って来た。

連理はどうしたんだろう？

「連理は今ルーに任せておる。落ち着いたらこっちに来るじゃろ」

俺たちの疑問には学長が答えてくれた。

そして、俺たちの疑問が解消されたのを見て、李さんが喋り始めた。

「それでは、ご説明させていただきます。

先程、連理の担当の者に連絡を取りまして、皆さんにお話しする許可を取ってまいりました。

勿論全てをお話しすることはできません。情報開示が許可されたのはかなり限られた部分のみになります。」

李さんは抑揚のない声で淡々と語る。

「皆さんお気づきだとは思いますが、連理は異常なほど膨大な気を持っています。

普段は自らの気で抑え込んでいますが、その総量はこの川神…いえ、日本でも連理を上回る人間はいないでしょう」

姉さんが『自分の3倍以上』って言っっていたが、そこまでなのか。

「私以上だということはわかっていたが、具体的にどれくらいなんですか…？」

姉さんがたまらず質問する。確かに表現が曖昧でわかりづらい。

「すみません。私も連理の本気を目にしたことがないので、具体的な数字はわかりません。

あくまでも目安の話になりますが、担当の者の話では、

一般人の気の量を10だとすると、武芸の実力者は50。実力者の中でも抜きん出た力を持つ者は100。

壁を越えた者が300。その中で更に力を付けた者が500。『武神』であるあなた、川神百代様は700程だという話です」なるほど。勿論状況で上下するだろうが、わかりやすい。

「因みにルーなんかじゃと400。ワシじゃと600くらいになるかの。

四天王じゃと大体450から500くらいじゃの」

李さんの説明に学長が補足する。

姉さんがどれだけ強いのかわかった気がするな…。

だとすると…

「姉さんは連理の気が自分の3倍以上あるって言ってたけど、

今の目安の数字を使うなら、連理は最低でも2500はあるってことか…」

「とんでもないわね…」

「あんなちっせえ体にどんだけだよ…」

俺の計算に愕然とするワン子に、呆れたように呟くガクト。

「いえ、その…」

ん？李さんがなにか言いづらそうだな。

「李さん…まさかもっと多いんですか…!？」

「なんだと…!？」

姉さんの言葉にクリスが反応した。

他の皆も騒然とし始める。

「5000くらいはあるんじゃないか!?スゲエなあ!」

「流石にもっと現実的な数字でしょ…!しょもない」

「でも李さんの態度からするとあながち間違っていないのでは…?」

『いつそ1万とか行っちゃってたりしてナー』

それぞれが勝手に予想して数字を述べていく。

すると、李さんが手を挙げた。挙手ではない、指を開いた状態でだ。

数字の5を表しているとしたら…

「おっ、5000か?」

予想を当てたとキャップが嬉しそうに言う。

「いえ、5万です」

『……………』

チョット何言ッテルかわかんナイナ。

「因みに” 少なく見積もって” 5万です。

あと、連理は修行らしい修行は一切行っておりませんので、これからの成長で更に増える見込みです」

俺たちは本当に人間の話を聞いているのか…？

もう規模が大きすぎて皆逆に落ち着いてしまっている。

姉さんなんて『お、おう…』としか言えてない。

『連坊ってサ○ヤ人？』

松風のこの一言が俺たちの気持ちを表していた。

「連理は人間ですよ…。」

しかし、人間でなかったほうがむしろ幸せだったかもしれない

李さんの一言が、緩んでいた空気を引き締めた。

どういうことだ？

「連理を見ればわかりますが、あの子の身体はとても小さく、未完成です。」

そんな体で異常なほどの気を制御できると思いますか？」

俺みたいな一般の武力しか持っていない人間では想像できない話だが、姉さんは違った。

「気の…暴走ですか…？」

しかし、李さんは首を振った。

「暴走ならまだ良かったです。問題は制御できるかどうかではなく、気の量そのものにあります」

量が多いことに問題があるのか…？

俺やモロなどの一般人は勿論、ワン子やクリスマスまでわからないよう

で、首を傾げて考える。

そんな中、まゆつちだけが顔を青くしていた。

恐る恐るといった声で、できれば外れていてほしいという表情で

「体に…負担がかかったのですか…？」

負担…？

「はい。多すぎる気は、連理の体を蝕んでしまいました」

「蝕んで…って」

答えを言われても理解できなかった俺たちに、学長が説明してくれる。

「例えばの、水風船に水をどんどん入れていったら、最後にはどうなる？」

学長の言葉に全員が背筋を凍らせた。

そんなの決まってる。

多すぎる水は、内側から風船を破壊してしまう。

しかし、そんなことがあり得るのか？

「実際、過去に連理は多すぎる気によって体に裂傷ができたり、突然骨折したりしたようです」

言葉を失った。

姉さんの拳を受けても傷一つ付かなかった連理が、『気が多すぎる』というだけで怪我をするなんて。

「そんな連理をどうにかしようと、あの子の両親は様々な手を尽くしました」

恐らくもうこの世にいない、連理の両親。

きつと連理のために奔走したんだろう。

しかし、李さんの表情は悲痛だった。

「ここからは詳しく話せません。

しかし、連理のために危険な橋を渡った彼らは、結果として死亡しました」

空気がずしりと重くなる。

李さんの声も暗くなり、僅かに体が震えているのがわかった。

「そして、自分にとって最も大切な存在である両親を亡くし、連理の心は…砕けてしまいました」

それまで絶対的な自分の守護者をなくしてしまった。

どれだけの悲しみが連理を襲ったのだろう。

「それからは九鬼の従者が保護し、気の制御を教えてきました。

しかし、心のほうは中々回復せず、不安定な精神状態で日々を過ごしています」

「お前さんから見たんじゃろ？あの子のあの状態を…」

河原で見た、あの連理の”笑顔”か。

「九鬼で過ごすうちに何とか日常生活を送ることはできるようになりました。

しかし、それらは全てある一つの思いから成り立っています。

それは、『いつか、なにかが自分を殺しに来てくれる』というあの子にとっての”希望”です」

「そんな…、そんなことが”希望”…?」

クリスが震えながら言う。

俺も出来れば聞きたくなかった。

「絶対的存在を無くし、取り残され、心を病んだ連理にとって、この世界は絶望でしかありませんでした。

保護した当初は酷いものでした。

食事も、トイレも自分ではできず…私達の言葉を理解していたかも怪しいものでした。

なのに、強い意志で毎日のように自殺未遂を繰り返しました。

世話係の従者は何度もそれを阻止しました。

殺してくれと暴れるあの子を止めたこともあります。」

耳を塞ぎたい気分だった。

恐らく李さんも世話係の一人なのだろう。あまりにも声にリアリティを感じる。

「このままでは不味いと感じた担当の従者は、とうとう強行策に出ました。」



『いつか”死”はお前を迎えに来る。だからそれまで世界を受け入れろ』と、連理に言い聞かせたのです」

とうとう我慢できなくなったクリスが立ち上がる。

「なんてことを言うんだ！あの子に…連理にただ黙って死んで行けと言っているような

「私達だってそんなこと言いたくなかった!!!」

クリスの声を、李さんの大声が遮った。

それまでの冷たい表情はなく、悔しさと、怒りを浮かべていた。

「クリス落ち着け。李さんの話を最後まで聞くんのだ」

クリスが唾然としているうちに落ち着かせる。

李さんの表情を見て、『すまない』と謝って再び腰を下ろした。

「いえ、申し訳ありません…」。

ですが…：それでもしなければならぬほど当時の連理は危険な状態でした。

荒療治とはなりましたが、それから少しずつ私たちに心を開くようになり、気の制御を覚え、学業にも取り組むようになりました。

しかし…：それらは全て先程の『言葉』の上に成り立っており、完全に心が回復する気配は見せませんでした」

そうか…：連理の心は未だこの世界に絶望しているが、『いつか死ぬことができる』という”希望”を持ち、それを待っているからこそ今は笑っていられるのか。

そしてその”希望”が起こした暴走が、河原で見た連理なのか。

つまり、この世界自体に希望を見出すことが出来れば、連理の自殺願望を打ち砕くことができる。

簡単に言えば、『この世に未練を残す』ことが、『連理の心を救う』手段となる。

「そこで私たちは、精神を安定させるため、気の扱いに長けた人物の近くに置くため、

そして、連理に様々な体験をさせるために、川神で過ごさせることにしました。

川神院で修行を体験させ、今までは通えなかった学校にも通わせま

す。

あの子が、新たな希望を見つけられるように」  
新たな環境で、新たな出会いをして、新たな体験をすれば、精神的にも刺激になる。

さつきまで怒っていたクリスも、辛そうな顔をしていたワン子やまゆっちも顔を上げた。

皆何をすべきかわかったようだ。その瞳には強い意志が籠っていた。

俺たちの顔を一人一人確認した李さんは、同じように強い意志を持った表情で言う。

「皆さんにお願いがあります。」

これは九鬼家従者としての依頼ではなく、私個人の”お願い”となります。

川神で過ごす連理を、あの子を……よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる李さんに……

「任せる！ いろんなところに連れてってやるぜ！」

キヤップが

「一緒に修行する仲だもん！ 楽しみだわ！」

ワン子が

「自分の義を通すため、連理は守ってみせる！」

クリスが

「私も救われた側の人間だし、たまには良いことしないかね」

京が

「連理にはもつと俺様の長所を見せつけねえとな！」

岳人が

「あんまり役に立てるとは思えないけど、今の話を聞いたらねえ」

モロが

「連理さんとはもうお友達です！」

『連坊にはこれからドンドンアタックしちゃうぜえ！』

まゆっちと松風が

「連理にはまだ許してもらってないし、可愛い子は放つてはおかない

さ」

姉さんが

「李さん、連理が『九鬼に帰りたくない』って言っても怒らないで下さいよ?」

そして俺がそう言うのと、李さんは嬉しそうに笑ってくれた。

「アレ?なんだか盛り上がってるネ?」

タイミング良く、襖が開いてルー先生が入って来た。その後ろから

...

「連理っ…」

「…っ」

まだ少し俯き気味の連理がついてきた。

「姉さんがすぐに連理の前に出る。」

連理は姉さんに少し怯えているようだ。

俺たちは二人の成り行きを見守ることにした。

姉さんは連理に視線を合わせる。

「連理…さっきは本当にごめん。」

もうお前に戦ってくれなんて言わない。

「お前の嫌がることなんてしないから…」

静かに語る姉さんを、連理は動かさず見つめていた。

「連理…もしお前が許してくれるなら、私と友達になつてほしい」

手を差し出す姉さん。連理はそれをじつと見て、ゆっくりと手を握った。

「うん…ボクも、ごめんなさい。モモちゃん」

そう言つて連理が笑つた瞬間、俺たちもやつと笑いあうことができた。

「有難う連理ー!」

勢いよく連理を抱きしめる姉さん。

「モモちゃ、苦しい…」

モガモガと姉さんから脱出してくる連理を今度は俺たちが囲む。

「よーし連理!これからは俺たちといっぱい遊ぶぞうー!」

「うん、ボクも楽しみ」

「ボクっ子かあ、榊原小雪とキャラかぶっちやったねえ」

「見た目に差があるから大丈夫だろ。俺様の好みは榊原だけだ」

「クリス、これでも私のことも許してくれるか？」

「ああ、これでもう全部チャラだ」

「ありがとう」

「クリス、ありがとう」ニコツ

「んー、やっぱり連理は笑うと可愛いな！なあ犬…犬？」

「おいしい！ワン子こっちで昇天してるぞ！」

「連理の笑顔と『ボクっ子』の威力か…妹も大変な扉開いたな」

「井上準みたいだよ…しょーもない」

「あの、連理さんはどこの学校へ入るんでしよう？」

『つか連坊って何年生なん？小学3年か4年くらい？』

まゆつちと松風の疑問におや？と思った。

そういえば学校入るんだよな。

聞いとかないとな。

「連理はどこの小学校入るのか決まってるのか？」

「そうだな、遊ぶとなると平日は自分たちが迎えに行くことになるだ

ろう」

「李さん、どうなってるんです？」

李さんに聞こうと見ると、何故かため息をつかれた。何故だ。

「小学校ではありませんよ」

「あれ？中学校だった？」

あちら、いくら連理が幼く見えるつつつてもそれは失礼なことし

ちやったかな。

「うちじゃよ」

学長が言う。

……は？

全員が学長を見る。

「だから、川神学園じゃよ。ちなみに2年じやの」

『……………』

チヨット何言ツテルカワカンナイナ。

その日は、『また学園で会おうね』と言う連理に『お、おう…』と返事をして解散となった。

なんていうか……すごいね、人体。

「ちよつと待ってください……」

連理さんが2年生ってことは……」

『連坊年上えええ!?!』

## 第五話 目に見える事だけが現実とは限らない

S i d e 大和

連理の出会いから一日おいて、月曜日。

朝から集まったファミリーの仲間たち全員で登校中。

連理とは唾然として別れた俺たちも、流石に落ち着きを取り戻していた。

「まさか連理が同学年とは…」

いまだに信じられないというか、実感が湧かない。

因みにまゆつちが一番動揺していた。

あれほど仲良く接していただけにショックが大きかったのだろう。

『とても失礼な対応をしてしまいました』と落ち込んでいたが、

松風の『でも連坊喜んでたし、いんじやね?』という言葉で持ち直した。

…自己完結だろうか。

日曜日は臨時集会を秘密基地にて行い、状況を整理した。

以下、会議録

………

姉さん「ジジイから聞いたが、飛び級でも何でもないらしい」

ガクト「マジで俺様とタメってことか!？」

モロ「多分委員長より小さいよねえ」

クリス「制服は着れるのだろうか?」

まゆつち「一番小さいサイズでも怪しいですよね」

ワン子「クラスはどうなるのかしら?」

大和「目的は人生経験だから、知り合いである俺たちのクラスへ来る可能性が高いな」

キヤップ「また面白くなりそうじゃねえか!」

京「授業とかわかるのかな」

姉さん「九鬼で勉強はしてたから大丈夫らしい」

大和「となると問題は…」

クリス「一部男子、特に井上だな」

モロ「ヨンパチにも気を付けないとね」

ガクト「連理の写真が高額取引されるかもな」

松風『川神学園スゲエところだな』

京「連理はそういうガード緩いっていうか、確実に無頓着だしね」

姉さん「お前等…真剣<sup>マジ</sup>で守ってやれよ…」

大和「できるだけ俺たちの誰かが一緒にいよう…」

……

以上、昨日の議事録でした。

学園に着いた俺たちは、教室へ向かいながら連理について話している。

一昨日は連理と遊べなかったからか、キャップは待ち遠しくて落ちて着かないようだ。

「早く連理来ねえかな！なあ！」

「落ち着け。編入が決まったの土曜日だろ。連理は勿論、学校側も準備があるだろ」

俺はまだ2〜3日かかると見ているが、うちの学長のことだ。

今日編入したって不思議ではない。

「連理がもつと大人っぽかったら俺様も楽しみにするんだけどな」

「これに関しては連理は助かってるねえ」

「ガクトに迫られるってトラウマものだしね」

ガクトの呟きにモロと京が突っ込んでいる。

言われたガクトは落ち込んでいたが、自業自得な上に俺も同意見だ。

「連理は自分が守る。できるだけ一緒に行動するつもりだ！」

「特にハゲには近づけさせないわ！」

クリスとワン子が息荒く決意している。

でも連理のためを思えばあまり過保護なのも良くないな。

「お前等あまり過保護にしすぎるなよ。」

危ないところを助けるのは良いが、やりすぎは連理のためにならないからな

「ム、安心しろ大和。連理を危険には近づけさせないぞ」

コイツちつとも理解してねえ。

甘やかされて育ってきたから仕方ないが。

「それが駄目だっつってんの。」

そんなんじや危機管理能力とか危険回避力が下がるだけだ。

連理のためを思うなら危機を乗り越える術すべを教えてやらなきやな」

「大和カッコいい!!結婚して!!」

「お友達で」

「我らがトップブリーダーは流石だねえ」

「連理もどつかのワンコロみたいに調教されちまうんじやねえか?」

人聞きが悪いな。俺はワン子のためを思ってやったのに。

「だがそれでは連理が可哀想だろう」

「お前は何様だ。」

ワン子は俺の言いたいことわかるよな?」

「えーっと、転ばないようにするより転んでも起き上がれるようにしたほうが良いってことよね?」

「よーしよしよしよし!」

「わふー。褒められたわ!」

信賞必罰は躰の基本だ。

「むう、そう言われると…そうだな」

クリスはなんとか理解してくれた。

そんなこんなで俺たちが教室へ入ると、連理よりちよつと背の高い委員長が話しかけてきた。

「おはようございます!直江君は知ってましたか?」

なんと今日、ウチのクラスに転校生が来るらしいのです!」

……学長オ…。

「マジかよ!どんな奴だ!」

「連理でしょ」

「連理かー!!」

キャップが凄く興奮してる。昨日から連理の話ばかりだもんな。

「あれ?皆さんのお知り合いですか?」

「まあね、知り合ったのは一昨日だけど」



俺たちの呼ぶ名前に聞き覚えがあったのだろう、小笠原さんがやって来た。

「ねえ、聞き間違いじゃないよね…？今れんりって言った？

……連理ちゃんじゃないわよね？」

「あれ？チカちゃんも知ってるのですか？」

小笠原さんは信じられないという表情だ。：気持ちはわかるが。

「その…俺たちもびつくりしたけど…あの連理だよ」

「ええええ!?!信じらんない!!」

うん。気持ちは凄いわかるよ。

「どうしたのですかチカちゃん!？」

「その子土曜日にナオツチと歩いてたんだけどね、すつごい可愛い子なのよ!」

「なんだとおおお!?!」

そこでやってきたのがヨンパチだ。要注意人物の一人である。

「突然過ぎて何の情報もなかったんだよ!」

女なんだな!?!どんな子だ!?!どんな子なんだあ!?!」

興奮しすぎだ。

「うっさいわよサル!まあ金髪美少女だとは言っておくわ」

「えっ……ヤバッ…ちよつとトイレ」

クリスを一瞬見たけど、何を想像したのだろう…。

「ホントサイテーよね」

「そんなに可愛い子なのですか？」

「連理の可愛さはちよつと言いきかせないな」

「アタシなんか二回は死にかけたわよ」

ワン子は徐々にキャラが崩壊していつてる気がする。

折を見て修正してやるべきか…。

「面白いから別にいいんじゃない？」

酷いな京。

「全員いるか?少し早いが席に着け!」

小島先生が入って来た。確かに時間はまだ早い、恐らく連理の自己紹介のためだろう。

因みにヨンパチはまだ帰ってきていない。

特に気にするでもなく席に着いた。

「おはよう皆。突然だがこのクラスに編入生が来ることになった」  
教室内が少しざわつくが、すぐに静かになる。

「それでは出雲！入ってこい！」

ガラッと扉を開くと、入ってきたのはやはり連理だった。

その姿を見た瞬間、男子からも女子からも歓声上がる。

連理の容姿なら当然だ。女子から見ても抜群に可愛い。

しかし、歓声はすぐに止み、潜めた声を中心となった。

俺もそのうちの一人だ。皆思っているのだろう…

連理…：…なんで私服なんだ？

連理は歓声にビクツと怯え、さらに声を潜められたのがわかったの  
だろう、少し怯えて俯きがちだ。

それでもなんとか教卓の横へ来ると、前を向いて自己紹介を始め  
た。

「出雲連理です。よろしくお願いします…」

人見知りしないとはいえ流石に不安なのか、俯いたままボソボソと  
喋る連理。

俺たちの存在にも気づいていない。

このままでは第一印象は良くないものになってしまうな…。

甘やかしすぎるのもどうかと思うが、しようがない。

「連理、連理」

俺が突然名前で呼んだので、クラスの皆が不思議そうにこちらを見  
る。

それと同じように連理も俺のほうを見た瞬間、輝かんばかりの笑顔  
を見せてくれた。

「大和!!」

知り合いを見つけて嬉しかったのか、こっちに走ってきてしまう連  
理。

「いやお前こっち来ちゃ駄目だろ。自己紹介はどうした」

「こっまで喜ばれると俺も嬉しいが、クラスの視線が痛いわあ…

「あつミャー子！ワン子！」

「聞けよ」

席の近い仲間も見つけてより一層喜ぶ連理に、もう苦笑いしか出ない。

そしていつの間に連理はワン子の呼び方を変えたんだろう。

土曜日の別れた後かな。

「なんだ。直江たちは知り合いか？」

先生も一瞬啞然としていたが、持ち直したようだ。

「はい。川神を案内したりしました。」

それで先生、連理は何故私服なんです？」

「うむ。なにせ突然だったからな。出雲にサイズの合う制服がまだ届いていないのだ」

ああ、それでか。確かに連理は小さいから、連理サイズの制服は在庫が少ないのだろう。

「今日中には届くらしいから、直江、知り合いなら面倒を見てやれ。」

制服が届いたら呼ぶので、事務まで案内してやってくれ」

「わかりました」

もともと世話は焼くつもりだったしな。

「それから出雲の席はそこだ。不都合があれば席替えをしても構わん。」

そうだな、出雲の事情はある程度聞いている。

椎名の隣にでも変えたらどうだ？まあ話し合っておけ」

「はい」

連理は緊張が解けたのか、もう普通に対応できていた。

因みに連理の現在の席は廊下に近い場所で、俺たちの席とは離れているが、

窓際の京の隣になれば後ろにクリス、その隣、京の後ろに俺。京とは反対側の隣にワン子がいる。

これなら授業の様子も伺えるし安心だ。

先生が連理の事情を知っていて良かった。

「それでは今日は連絡事項もないのでこれでホームルームは終了とす

る。

授業までの間なら出雲の自己紹介の時間とすることを許可する。

委員長、号令を」

「はい。きりーつ。礼」

小島先生が退室していくと、クラスの奴らが群がってきたが、その前に行きかかっていることがある。

「待って待って、先に連理に確認することがある」

席替えの話だ。

連理の話聞いて、先生の言う通り京の隣に席を移した。

「連理、教科書とかはもう持ってるの？」

京が連理に話しかけたのが不思議なのだろう。

ビックリしていたクラスメイトにワン子が知り合いであることを説明していた。

「うん。昨日もらったよ。あと身長測ったりした」

リュックから教科書や筆記用具を出していく連理。

なるほど、昨日は編入の準備をしたのか。

「ねえナオツチ、先生の言ってた事情って？」

「あー…」

ちよつと言いくいにくいな。連理が聞いているのは気まずい。

京にアイコンタクトを送る。

「連理、次の授業どこやってるか教えるよ」

「うん。ありがとう、ミヤ子」

流石の京だった。空気の読めるモロもフォローに向かってくれた。

「連理は誰に勉強教えてもらったの？」

「九鬼の執事のお爺ちゃん」

連理の注意を引きつけて、クラスの皆に軽く手招き。

「見てればわかると思うけど、連理はちよつと精神的に幼いというか  
…

そういういろんな事情が重なって、今まで学校に通えてなかったんだ。  
だ。

だから俺たちが出来るだけ面倒見るように言われたんだけど」

少し小声で説明していく。勿論要所をぼかしながら。

「まあ、俺が言うのも変だけど、よろしく頼むよ」

俺が言うと、皆はとりあえず納得してくれたようだった。

「わかりました！お姉さんに任せてくださいー！」

「有難う委員長。でも皆もそうだけど、あからさまな子ども扱いはいなくていいから。」

普通に接してくれればそのほうが連理も喜ぶよ」

「ふーん、わかったわ。まあ、いい子だっことは私も知ってるしね」

委員長と小笠原さんは面倒見がいいほうなので、安心できるな。

話が終わると連理の元へ行ってみた。

「京、連理はどう？」

勉強の確認をしていたので、聞いてみる。

「意外とできてるよ。平均ぐらいかな」

意外って…まあ意外だけどき（↑失礼）

流石に九鬼で勉強してただけあるってことか。

その後はクラスの皆がいろんな質問を連理にしていた。

一応変な質問をされないように俺が隣に控えていたが、大丈夫なようにで安心した。

まあ、このクラスにはそんな捻じれた性格の奴はいないしな。

途中でヨンパチが連理にセクハラをしようとしていたが、ワン子と 크리스に撃退された。

これで、俺たちが心配している問題はあと一つ…。

来るとしたら次の休み時間だな…。

………

チャイムが鳴り、授業の終わりを告げる。

連理は大人しく授業を受けていた。

集中力はあるみたいだが、時々首を傾げていたので、理解力は低いんだろうか。

「………おおおおおおおおお!!!」

そして危惧していた事態が発生する。

「来たか！ワン子、クリス！」

「あいさー!」

「任せろ!」

二人が連理の前で戦闘態勢を取った瞬間、扉が勢いよく開いた。

「女神がご降臨なされたと聞いて!!」

ロリコンハゲ  
井上準。連理の天敵が現れた。

「来ると思ったぜ井上…。連理には指一本触れさせんぞ」

「女神を独占なんて許されると思ってるのか坊主…」

坊主はお前だ。

「俺は何が何でも連理さんとお近づきになるぞおお!!」

どんな執念だよ。

「クツ、なんて禍々しい気を放つんだコイツ…!」

「アタシ気分悪くなってきたわ…」

毒霧でも散布してんのかこのハゲは。

「そこを退け直江!今なら力づくは勘弁してやるよ」

クソ…俺でもコイツから発する嫌な気が感じられる…!

だが…

「甘いな、俺たちには切り札があるんだ…」

「ああ?切り札?」

「先生!お願いします先生!」

「おいおい用心棒でも雇ったってか?ちよつとやそつとじゃ今の俺に

は敵わないぜえ?」

いや、お前だからこそ効果抜群なんだよ…!

俺たちの用心棒…それは!

「井上君、乱暴はいけないと思います!」

「!!……い、委員長…!!」

そう、我らが委員長、甘粕真与である!!

「ち、ちち違うんです委員長(ここのこ)これは…!!」

委員長には台本を渡してある。

井上が粘れば粘るほど高い精神的ダメージを受けるような台詞に

なっていくのだ。

「連理ちゃんを怖がらせてはダメなのです!」

「ぐっ！ぐううううう…」

頭を抱えて悶える井上。

「ここまでのダメージだとはちよつと俺も予想できなかつたぞ。

「ですが委員長！俺は、俺は連理さんと…!!」

「連理ちゃんに嫌われても知りませんよ！」

「ぐあああ!!…つまだ諦めんぞ!!」

意外と粘るな…。自分が辛くなるだけだというのに。

「どんだけ連理に執着するつもりだ。」

「あの…仲良くなるのはいいことだと思つのですが…」

おっと、人が良すぎる委員長が同情し始めたぞ。

俺は小笠原さんにアイコンタクトを送る。

勿論対策済みだぜ！軍師舐めんなよ。

「ダメよー真与。コイツを許したら傷つくのは連理ちゃんなんだから」

「そうなのですか？」

「貴様!!余計なことを…!」

「このまま止めを刺させてもらおう。」

「無理矢理なんて…そんな人嫌いです!」

……  
嫌いです……きらいです……キラ イ デ ス

「ぐっはああああ!!!」

井上は血を吐いて崩れ落ちた。

……なんで血吐いたんだ？

しかしこれで連理を守ることができた。

「……虚しい戦いだつた」

「では私が慰めてあげましょう」

「断固遠慮する…つて葵冬馬」

「失礼するのだー!」

榊原小雪までやって来た。

「ハゲを回収に来たのか」

「ええ、ホームルームで突然ソワソワしだしまして。」

何とか授業は受けさせましたが、終わった途端に走り去ってしまいました」

土曜日の事と言いなんでこいつは連理の存在を察知するんだ。

「監督不行き届きだぞ。しっかりしてくれ」

「すみません。恋は盲目ですので」

なんか違う気がするな。

「トーマ。レンレンと話してきて良い？」

「ええ、いいですよ。私も挨拶しておきましょう」

「口説くなよ」

「善処しますよ」

全然善処するつもりないな。

「レンレン！」

「ユキ」

「同い年だったんだねえ。マシユマロあげる」

「ありがとう。ごめんね、金平糖持ってない」

「今度買いに行こうよ」

「うん！」

連理と榊原の会話はいつ聞いてても和むな。

「あの二人の会話は平和だねえ」

モロも大分穏やかな顔してるな。

「こんにちわ。連理さん。先日は碌な挨拶もできませんでしたね。」

改めて、葵冬馬と言います。冬馬と呼んでください」

「こんにちわ、トーマ」

「こんにちわ」

榊原が連理の真似して遊びだした。

「すごいね。あそこの空間花が飛んでるよ」

「俺にも見えるよ京。つかお前あそこから逃げてきたのか？」

「私にはあの空気は耐えられなかったよ。」

もつとジメジメしてないと椎名菌は繁殖できないから」



「心が痛むわあ」

相変わらず京の自虐は重いな。

「美味しい金平糖のお店を知ってるんです。

今度私と行きましようか」

口説くなつつつたのにあいつは。

「ふーん…そっか。じゃあ、今度ね！」

満面の笑みで返した連理。深く考えてないな。

「……………」

どうしたんだ？連理はOK出したのに。（意味はわかってないけど）

「おいどうした？」

「なんでしよう、すごく自分が汚い人間だと思い知らされたような…」

「連理は手強いな」

「私を慰めてくれませんか？」

「立ち直り早いな消えろ」

概ね問題は解決した休み時間だった。

……………

午前の授業が終わった。

連理は十分授業に慣れてきたみたいだ。

数学は得意なようで、簡単な問題だが当てられた時は普通に答えていた。

というか先生たちもなんだか連理には甘い気がする。

口調だとか、態度が緩い。

まあ、見た目も言動も小学生みたいだから自然とそうなるのか。

「連理、昼飯はどうするんだ？」

弁当を出し始めたクラスメイトを見てキョロキョロしていた連理に声を掛けた。

「持っていないよ」

「金は持ってるか？」

「ん。これ」

鞆から取り出した財布を掲げる。

「こら、財布を不用意に持ち上げるな。

んじや、俺たちと学食行くか」

「あ、アタシもいくわ!」

「自分もだ」

「私もイクうつ!」

「下ネタ禁止」

「俺様もご一緒するぜ!連理も人数多いほうが良いだろ!」

「女子と一緒に食べたいだけでしょガクトは。僕も行くよ」

「キャップは?」

「もういないよ」

ホントに自由な男だな。いなくなるときは突然だし。

俺たちは連れだつて教室を出た。

「む、直江、出雲。丁度良かった」

廊下を歩いていると小島先生に声を掛けられた。

「先程出雲の制服が届いたので、昼休み中に取りに行け」

「わかりました」

「はい」

事務に行くのは学食の後でいいか。

「弟と妹と連理はつけくん!」

目の前に突然武神が現れた。

何かを脇に抱えている。

「ひい、ひい」

「まゆつち!?!」

まゆつちが縮こまって姉さんに抱えられていた。

どうしてこんな状態に?

「お昼を食べようとしたら突然現れたモモ先輩に連れ去られ、瞬間移

動でここに…」

『キャトルミューティレーションってあんな感じで攫われるんだね

きつと』

少なくともこんな物理的方法じゃないと思うな。

姉さんとまゆつちを加えたメンバーで学食へ行くと、キャップがい

た。

「なんだよなんだよ！仲間はずれとかズリイぞう！」

「キャップが勝手にどっかいったただけだろう」

結局全員揃って昼食を食べた。

学食ではやはり連理は目立っていた。

一人だけ私服で浮いているのもあるが、やはり小さくて愛らしい容姿に男子も女子も釘づけだった。

「黙々と食べてカワイイなー連理は」

学食のうどんを食べる連理に姉さんもご満悦だ。

「ごちそうさま」

猫舌だった連理が一番最後に食べ終わった。

いちいち可愛いな。

「よし、それじゃあ連理は俺と事務に行くか」

「わかった」

「アタシたちは先に戻ってようかしら」

「そうだね、ワン子は戻って宿題やらないといけないし」

「忘れてたわあ…」

「では自分たちは先に教室へ戻ろう」

それじゃ、と言って皆は解散していった。

「姉さんとまゆっちはどうする？」

「私は着いていくぞ。速攻で着替えさせて連理の制服姿を愛でるんだ」

「わ、私もお供させていただきます！もつと連理さんとお話したいので」

『着替えを手伝ってあげたいとかじゃないんよ？』

聞いてねえよ。

4人で学食を出て、事務へ向かう。

歩いているだけで連理は注目を集めるな。

連理もちよつと居づらそうにしている。

「大和。トイレ」

「もうちよつと言い方をだな…」

待ってるから行ってきなさい」

「私も着いていこう！」

変態か。流石に引くぞ姉さん…。

『姉さんは欲望に忠実すぎるとオラ思うんだ』

「同感だ」

この時、俺とまゆっちは完全に油断していた。

姉さんもだ。

「な、おい連理!？」

姉さんの焦った声に振り向くと、それは突然目に入って来た。

「連理さん!？」

「連理!? どうして!？」

あまりにも予想外。

疑問ばかりが浮かんできて、一歩も足が出なくなってしまった。

完全に頭が混乱している。

どうすればいいのか、正しい行動を起こすことができない。

なぜ？

頭では到底理解できそうにない。

受け入れがたい現実を、脳が拒否し続けた。

どうして……

?

——— どうして連理は、男子トイレに入っ……

## 第六話 連理と世界を繋ぐもの

「うーす」

「なんだよ井上。まだ連理に未練があるのか？」

「いやいや、さっきの俺はどうかしていた。」

若とユキに怒られちゃった。すまなかった」

「あー榎原さん連理と仲良かったもんねえ」

「もう無理に近づいたりしねえよ。だから挨拶くらいは許してくださいー！」

「土下座!？」

「どうするのだキャップ？大和はいないから判断してくれ」

「連理を怖がらせたりしないならいいんじゃないか？」

「すまねえ風間…！」

ところで連理さんはどうしたんだ？」

「今大和と制服を取りに行ってるぞ」

「あーじゃあもちつと待たせてもらうかな。」

…大丈夫だって、挨拶したら今日はもう帰るよ」

「まあ、約束破ったら委員長に嫌われるだけだしな」

「ぐううっ!!」

「まだダメージ残ってるみたいだね」

「帰ったぞー…」

「ただいまー」

「あ、大和」

「お帰り。連理も…え？」

「ん？…は？」

「え？」

『……………え？』

……………

Side 連理

大和と一緒に教室へ戻って来た。

なんでかわからないけどモモちゃんとまゆっちもついてきた。

でももつとわからないのが…

なんで皆ボクを見て固まってるんだらう？

服が違うから驚いたのかな？

不思議に思っただけを皆をジッと見てたけど、後ろにいたモモちゃんがボクの横に並んだ。

「おーおー。予想通りの反応だな」

『鳩が豆鉄砲つつか対戦車ライフルで粉微塵にされたような顔してるね』

「松風、それでは顔は見れませんよ」

『実際は自分で地雷踏んだだけなんだよね』

モモちゃんは楽しそうに笑ってる。

まゆつちと松風はよくわからないことを言ってた。

三人ともさつきまですごく慌ててたのに。

「モモ先輩…？連理のその恰好は…？」

ミヤー子がモモちゃんに聞いた。

ボクの服装が気になるみたい。そんなに驚くことかな？

シャツの裾を引っ張って自分の格好を見てみたけど、おかしなところはないよね？

「……だめ？」

「え、駄目じゃないけど…なんで男子の制服なの？」

「……制服でしょ？」

ミヤー子は変なこと言う。ボクが女の子の制服を着るほうがおかしいと思う。

だってボクはどこから見ても ☆ TO ☆ KO 男 じゃないか。

「いや、そういう事じゃ…」

なにが変なのかな。なにか間違えちゃったのかな。

大和の服を引っ張って自分と見比べてみる。

「大丈夫。連理は間違ってるよ」

大和はなんだか気まずそうに笑って言ってくれた。

「……俺たちが勝手に勘違いしちゃっただけだから」

「そうなの?…じゃあいつか」

なんだ。ボクが間違えちゃった訳じゃないのか。良かった。

「えー…と、大和?」

クリスが大和に話しかけた。なんだか怖いものを見たような顔をしてる。大丈夫かな。

「あー、うん。連理の格好は何一つ間違っていないぞ」

『は?』

「……つまり、連理?」

ワン子がボクの顔を見た。クリスとおんなじ顔してる。

ホントに皆どうしちゃったのかな。

「連理は……男の子だったの?」

「……?」

なんでそんなこと聞くんדר?今更だよ。

不思議に思いながら頷いた。

ちよつとの間、皆さつきみたいに固まったけど、今度はすぐに動き出した。

『ええええええええええええええええ!!?』

怖い!声大きい!怖い!

なんで皆怒ってるの!?

ビツクリしたのと怖かったので、隣にいた大和の後ろに隠れた。

モモちゃんが笑って頭を撫でてくれた。喧嘩しちゃったけど、モモ

ちゃんは優しい。

やつぱり『お姉ちゃん』って呼んだほうが良いのかな。

でもモモちゃんは友達になってくれるって言ったから、やつぱりお姉ちゃんは違うかな。

「連理、皆ビツクリしたただけだから、怒った訳じゃないよ」

大和が振り返ってそういいながら、ボクの背中をpushした。

大和はボクが思ってることをわかってくれる。なんでわかるんだろう?すごい。

前に出るのはちよつと怖かったけど、クラスの皆を見たらもう怒っ

てなかった。

大和の言う通り、ボクが怒られたわけじゃないみたい。

ドサツと何か落ちる音がした。あれ、今倒れた人朝に教室に来たお坊さんだよね。

「えー!? まっじで!? 信じらんない!」

「お姉さんもこれにはビックリなのです」

「もう美少年系ってレベル系じゃない系〜! つつかマジでか!!!」

チカちゃんとイインチョコとクロちゃんが騒いでた。

この三人は朝に仲良くなった。

チカちゃんはお菓子屋さんで金平糖を売ってる。色々なお菓子を教えてくれた。

イインチョコには何度も『ちゃんはやめて』って言ったけど、『お姉さんですから』と言って聞いてくれなかった。よくわからないけどお姉さんならしょうがないのかな。

クロちゃんは最初見た目が真っ黒で怖かったけど、ボクの髪を褒めてくれたのでいい人だと思った。でも何を言ってるのかはわからないことが多い。羽黒黒子だからクロちゃん。

いやそんなことより、なんで皆騒いでるんだろう?

そんなにビックリすることがあったのかな? ちよつと気になる。

「大和?」

こういう時には大和に聞くのが一番だよね。

「あー……んー……」

でも大和は困ったような声を出すだけで、なかなか答えてくれない。

「モモちゃん?」

「そうだな。連理が可愛すぎるのがいけないんだ」

ずっと笑ってたモモちゃんにも聞いたけど、ボクを褒めるだけだった。

嬉しいけど恥ずかしい。でも今そんなこと聞いてない。

まゆつちのほうを見ると、気まずそうな顔して黙っちゃった。

でも、松風が代わりに答えてくれた。



『皆連坊が男だったことに驚いてんのさあ』

…どういう事？松風が何言ってるのかわかんないよ。

「男だよ？」

『連坊が女だと思われてたってことさなあ…』

……………は？ますますわけがわからないぞ。困ったぞ。

「………なんで？」

「連理が可愛すぎるのがいけないんDA！」

それはさつき聞いたよモモちゃん。

「はあ、こりや収集つかないな…」

大和が手を顔に当てていた。すごく疲れた声をしてた。

……………

Side 大和

結局あその後、騒ぎを聞きつけた小島先生が登場し事態を收拾してくれた。

先生は連理の性別を知っていた。まあ当然だな。

俺たちを一喝して混乱を収め、葵冬馬にショック死していた井上を回収させた。

井上はそのままSクラスの隅っこで転がって一日を過ごしたらしい。阿呆か。

小島先生はやっぱり連理には優しくかった。教師として鼻屑するよ  
うな人ではないけど、連理に『大丈夫か？』と声を掛けたり連理の事  
をよく気にかけている。

事情を知ってるといつても同情的な雰囲気ではなく、弟を見守る姉  
のような顔をしていた。

連理を連れてきたメイドの李さんも同じ顔をしていたな。

小島先生は年下がタイプというのもある。連理は正にどストライ  
クなんだ。ヒゲ無念。

もしかしなくても連理は年上キラーだな。

外見も相まっているが、雰囲気が保護欲を掻き立てるのだ。

俺が時折使う『秘技・年下光線』（年下好きの女性に効果的な光線。  
自分のお願いを潤んだ目で訴える要するに上目使い。多用するのは

危険)を全身で放っている。

それが男子にも影響するから恐ろしい。

一見落ち着きを取り戻したように見えた教室内だったが、授業が始まる頃にはあちこちから絶望したような溜息が聞こえてきた。主に男子のものだ。

少しでもロリコンの気があればまあそれはそれは残念なことだろう。

中には開き直ったように『それはそれだな!』とか聞こえてきたので連理の守りを固くする必要がありそうだ。流石に危険極まりない。

女子のほうは特に落胆することはなかったが、嬉々として『スカート』がどうのと話しているのは注意せねばなるまい。

ウチのクラスの女性陣にはモロのもう一つの姿『卓代ちゃん』という輝かしい前科があるのだ。

モロが内心で新しい扉を開いたので止めるつもりはないが、連理は恐らくあからさまな女装は嫌がる。

精神年齢的に思春期前の連理は他人の性別には無頓着だが、自分の性別は理解している。

先程の混乱も連理が『自分は男であるし、当然周りも男として見ている』という微妙な勘違いをしたことも原因の一端だと思っている。

実際松風の『周囲から女だと思われていた』発言に驚いていたし、わかりづらいがイラツとしたようにも見えた。

よく考えれば、“ちゃん”付けを嫌がったのも、手を繋ぎたがらないのも当然だったな。

そんな考察を重ねるうちに、放課後を迎えた。

教科書を片付けていると扉が開き、Sクラスのメイド・忍足あずみが入って来た。

「邪魔するぜえ」

ホントに主人のいないところだと口の悪いメイドだな。

「連理いるか?」

そうか、従者で世話してたならこの人と知り合いでもおかしくはない。

「あずみ姉！」

「あ、”あずみ姉”!？」

連理が姉と呼ぶほど慕っているのには驚いたが。李さんでも呼び捨てだったのに。

連理は忍足あずみの前まで飛んできた。

「おう連理。初めての学校はどうだ、問題はなかったか？」

忍足あずみは普段からは考えられないほど連理に優しくしていた。

表情は『優しい姉』というよりも『頼りになる姉御』といった感じだが。

「楽しいよ」

「そうか。困ったことがあったらちゃんと見えよ？」

「うん」

「よし。ちよつと直江に話があるからまた後でな」

うん？俺に話？

忍足あずみは俺に近づくと人の輪から離れた場所で話し始めた。

「おう、連理が世話んなってるみてえだな」

ホントに姉御肌だなこの人。

「まあ、友達になったしね」

「李から聞いている。連理についてどこまで知ってるかもな。」

それで連理なんだが、島津寮に住むことになった」

「また突然だね」

九鬼に住むんじゃないのか。

「これもお前等と連理が仲良くなったからできるんだけどな。」

九鬼に住む予定だったが、それだとどうしてもアタイらが世話しまう。それじゃいつまで経っても連理は子供のままだ。

そこそこ信頼できる場所に放り込んだほうがアイツのためになるってーことだ」

「なるほど。それで俺が呼ばれたってことは、目を掛けておけばいいのかな？」

寮に入るだけなら軽く挨拶すればいい話だ。

恐らく川神学園側からも提案されたのだろう。学長なら俺の人なりも知ってるからな。

「話が早いぜ。だが甘やかすのは無しだ。あくまで自立を目指す方針だからな」

「それは俺も思ってた。俺たちがすべきことは“世話”じゃなくて”手伝い”だね。

忍足さん、何か注意すべきことは？」

「注意つつつても地雷踏まないようにするくらいだ。お前等一回踏み抜いてるからわかるだろ」

「面目ないね」

「連理が許してるなら何も言わねえよ。話聞いた限りじゃ地雷ン中でも小せえ奴だ。本気で取り乱した訳じゃない」

あれで軽いほうなのか？連理の闇が深くて俺には想像できない。

「NGワードとか教えてもらえると助かりますね」

「普段はストッパーかかっているからそこまで気にすることはねえ。最近は大分落ち着いてきたからな。

一昨日の件だって川神百代レベルの力だったから起きたことだしな」

あー連理強いらしいからな。姉さんくらいの力がないと傷つけられないのか。

「じゃあ姉さんが不用意に暴力振るわなければ”スイッチ”は切り替わんないのかね？」

「スイッチか、言い得てるな。まあそう思っただら問題ねえな。間違っても過去を詮索したりすんなよ。

両親の事とかは軽いことなら大丈夫だが、できれば避けたほうが良い」

この前も泣きながら『会いたい』って言ってたしな。

「わかった。仲間にもそう伝えるよ。…そういえば連理ってハーフ？」

見た目完璧に外人なんだよな。連理に質問が行く前に俺が知っておけば対処はできる。

「母親がロシア人だ。父親は日本人。名前は両親がバカップルだったからそうつけたって聞いてるぜ」

忍足さんは俺が考えてることが分かったのか聞かれそうなことを教えてくれた。

比翼連理か。まあバカップル云々は置いといて、仲のいい家族だったんだな。うちと同じだ。

「両親と一緒にヨーロッパを転々としてたみたいだな。日常会話は日本語で話してたみたいだが、日本に来たのは九鬼に保護されてからだ」

「もしかして語学強い？」

「英語、ロシア語なら軽く話せたはずだ」

なんだよ。見た目良くて実は強くてバイリンガルって。チートだよね。

「まあこんなところか。荷物はもう島津寮に届いてるはずだ。金の管理は自分でさせてるが、一応見といてやってくれ」

「了解」

「あと…」

忍足さんはポケットから小さなポシェットを取り出して、俺に渡した。

「これは？」

「もし連理がひどく取り乱したとき…スイッチが入った時のための保険だ」

中を開けると錠剤の入った小瓶と、用法、用量の書かれた紙。あとは電話番号の書かれた紙が入っていた。

「鎮静剤だ。睡眠薬のようなモンだと思え。間違っても他の奴に飲ませるなよ。それとアタイの連絡先だ。なんかあったらそこに掛ける」

俺は早速連絡先を携帯に登録して、番号の書かれた紙を忍足さんに返した。

「外出先とかの制限は？」

「無い。と言いてえが、県外に出る場合は教えてくれ。場所と日数を教えてくれれば特にこつちから言う事はねえよ」

「わかった」

「面倒掛けちまうな。今度九鬼からなんか送るからよ」

「俺たちも好きでやってるんだ。気にしなくても良いよ」

「こつちも大人としての面子があんだよ。大人しく受け取っとけ。」

……連理をよろしく頼む」

俺の目を見てそういう忍足さんは…

「李さんと同じ顔だね」

「アイツは特別連理を気に掛けてるんだよ。連理がもう少し大人になつて告白でもすりゃ一瞬で落ちるぜ」

おお。李さんの好みがサラツと暴露されたぞ。

『あのメイドのお姉さんとお近づきになりたい』と言っていたガクト…残念だったな。

「フハハハッ！我、降臨である！」

「きやるーん♪英雄様ー！こちらにおいでになったのですか!？」

忍足さんの主、九鬼英雄がけたたましく登場した。そして忍足さんの変わりようが凄い。

「ウム！我も連理が気になったのでな！」

「その優しき心！素敵です英雄様！」

「ひでおー！」

「おー連理！どうだ？学校は楽しいか？」

忍足さんと同じように九鬼英雄に近づいた連理。ちよつと意外だが仲が良いらしい。

「友達できた」

「そうかそうか！ならばあとはしつかり勉学に励むが良い！」

九鬼の連理に対する態度は友達というよりも兄弟に近いな。

「九鬼君は連理と仲が良いのねえ」

「おおおおお一子殿！挨拶が遅れて申し訳ない！」

我は連理が九鬼に来てから良く一緒に遊んだ仲なのです！我の姉妹も連理とは特別に仲が良いのですぞ！」

「そ、そう」

相変わらずワン子は九鬼のテンションが苦手らしいな。

「一子殿！申し訳ないが我はもう行かねばならん。連理をよろしく頼みます」

その一瞬だけ九鬼は真剣に、落ち着いた言葉で言った。それだけ連理を大事に想っているということだ。

「ええ、連理は友達なもの！」

ワン子もそれがわかったのだろう。胸を張って答えていた。

「かたじけない！あずみ！我は一度教室へ戻る！お前も挨拶を済ませよ！」

「了解いたしました英雄様——！」

忍足さんは連理に目を向ける。

「連理さん、しっかりと勉強して下さいね？危ないことや周りに迷惑になるようなことはしてはいけませんよ——！」

忍足さんはそんな母親のような言葉を連理に言っていた。

「むー……ババア——！」

!?

なんで突然怒ってるんだ連理は!?!連理がそんなこと言うところ初めて見たぞ!?!

「誰がババアですかー?そんなこと言う口は私が縫ってしまいましようかー!?!」

「フハハハハッ！相変わらずあずみには反抗期なのだな連理よ——！」

ビックリした：そういう事か。忍足さんは連理にとって母親代わりと言ったところなんだな。

さっきの連理への言葉も母親っぽかったし、忍足さんも連理の事は大事に想ってるみたいだ。

「それでは我は行くぞー！さらば連理と一子殿と庶民よ！フハハハハッ——！」

来た時と同じようにけたたましく教室を去る九鬼とメイド。普通に退場できんのかアイツは。

「まったく喧しい主従だぜ」

「それよりもガクト、僕は連理が突然暴言を吐いたことにビックリしたよ」

やっぱりモロも驚いたんだな。皆も頷いている。

「連理は忍足さんのこと嫌いなのかしら？最初は凄く嬉しそうにしてたのに」

「あずみ姉は好きだけど、いつも子ども扱いするのはイヤ…」

「九鬼英雄も反抗期って言ってたもんね。母親みたいなものかな」

ムツとした表情のまま言った連理に、京が俺と同じ考察を述べた。

「それよりもよー！これから遊びに行こうぜ！」

キャップが我慢の限界といった声で提案する。

「いや、キャップ。連理はこれから引越し先の片付けをしないといけないんだ」

「そうなのか？どうして大和がそんなこと知ってるんだ？」

「さつき忍足あずみと色々話しててね。島津寮に入ることになったからって」

「マジか！また楽しくなりそうだな！」

「これからよろしくな、連理」

寮生であるキャップやクリスは嬉しそうだ。

京もわかりづらいが喜んでるみたいだ。少し心配だったが、連理とは気が合うと言ってたし良かった。

「そうとなりや歓迎会だ！」

「おいまでキャップ。いきなりすぎる。後日でいいんじゃないか？」

「こういうのは早いに限るぜ！麗子さんに頼んでくる！」

キャップは風のように走り去っていった。しょうがない男だな。

「仕方ない。ワン子、ガクト、モロ、連理の片付けを手伝って早く済ませるぞ」

「メンドクセーがしようがねえ。歓迎会の飯は食いてえからな」

「勿論手伝うわ！お姉さまも呼ぶわね！」

「頼んだ」

まゆっちにも連絡しないとな。後は麗子さんに食材とかの相談して、必要なら買い出し班と引越し班で別れるか。

「そういうわけだ連理。一緒に帰ろう」

「うん」



俺たちは連理を連れて帰路についた。

.....

島津寮前。

麗子さんに連絡したところ、連理の荷物と一緒に九鬼の従者（恐らく李さん）が食材やら菓子折りやらを届けに来たらしい。さすが九鬼は抜け目ない。

上機嫌で歓迎会をOKした麗子さんだった。

「ただいまー」

「おう、お前等か。…あ？編入生も一緒か」

玄関の戸を開けると、ゲンさんが出かけようとしていた。

「うん。今日から島津寮に住むことになったんだよ」

「出雲連理です。よろしくお願いしますっ」

「また急だな。源忠勝だ。よろしくな」

ゲンさんが……デレた……!?

「直江お前気色悪いこと考えてんじゃねーぞ」

「い、いや……だってゲンさんだったら『あんま騒がしくすんじゃねーぞ』とか言いそうだったから……」

「コイツ相手に凄んだらイジメに見えんだろうが」

どうやらゲンさんの中で連理は子供に分類されるらしい。良かった……ゲンさんがショ○コンじゃなくて……。

「おい……」

「ま、まあゲンさんがそう言うならそうなんだろうね！

ところでこれからバイト？俺たち連理の歓迎会やるんだけど」

「悪いが俺は不参加だ。バイト行ってくる」

ゲンさんはそのまま出て行ってしまった。

「お、大和ー！麗子さんが歓迎会しても良いってよ！」

キャップの声がりビングから聞こえたので、そっちへ向かう。

「あら……その子はどうしたんだい？」

居間に入ると、連理を見た麗子さんが首を傾げている。

「麗子さん、この子が新しく入寮する出雲連理ですよ」

「はあ？……はあー随分と可愛らしい子が来たもんだねえ」

やっぱり一目じゃ男だつてわからないよな。

「出雲連理です。よろしくお願いします」

「あら、礼儀正しい子じゃないかい。私が寮母の島津麗子だよ。よろしくね。飴ちゃん食べるかい？」

麗子さんが大阪のおぼちやんみたいになつてる…

「麗子さん、食材とかの買い出しは必要ですか？」

「そうだねえ、食材は九鬼からもらったけど飲み物が少ないね。買ってきてもらえるかい？」

俺たちは買い出し班と引越し班に分かれて作業を始めた。

「あれ、クツキー？」

「連理、久しぶりだね！ここに住んだつて？これからよろしくね！」  
連理は九鬼でメンテナンスを受けていたクツキーと知り合いらしい。特に驚く様子もなくキャップがつまらなそうにしていた。

途中でまゆっちが帰ってきて、麗子さんの料理を手伝ってもらつた。

買い出し班が帰ってくるころには引越しも大方終わっており、俺たちは料理の完成を待っていた。

「肉もつてきたぞ〜」

姉さんが川神院から肉を貰つて来たので、急遽焼肉も追加することになる。

やっとのことで歓迎会が始まった。

『乾杯！』

「ほら連理！お前の歓迎会なんだからもつと食え！」

「ありがとう」

焼肉奉行となったキャップがどんどん連理の皿を肉で満たしたりと、騒がしく飲み食いしていったが…

「ここで風間ファミリィ臨時集会を開催する！」

さつきまで肉を焼いていたキャップが突然そんなことを言い出した。

まあ、議題については想像がつく。

連理を風間ファミリィに入りたいのだろう。今更な感じはするが。

「それで議題は「別にいいんじゃない?」……っておい!俺が話して……今の京か?」

「そうだけど?」

これには俺も驚いた。クリスマスやまゆつちの時には反対してたのに。「珍しいな。京がここまで心を開いてるのは」

「そうね、でもアタシも賛成!」

「自分もだ」

「私ももつと仲良くなれたらいいと思います!」

「僕も反対はしないよ」

「別にいいんじゃないか?まだ女に興味ないみたいだしな!」

「それ大事なことか?まあ私も賛成だ。可愛い子が増えるのは良いことだ」

「元々特別会員なんだしな。俺も賛成だ」

満場一致で可決してしまった。まだ議題も発表されてないのにな。

「……?」

案の定連理は首を傾げて固まっていた。

「連理!俺たち風間ファミリーの正式メンバーにならないか?」

「なにをすればいいの?」

「別になんてことはないよ。皆で集まって遊んだり、金曜の夜には秘密基地に行つて、休みの日の予定を立てたりするんだ」

「秘密基地?」

「おう!メンバーになれば連れてってやるぜ!」

連理は秘密基地がどんなものなのか考えているようだ。しばらく考えた後、笑って答えた。

「面白そう……ボクも皆と遊びたい」

「決まりだな!これからよろしく頼むぜ!」

こうして風間ファミリーに新たなメンバーが加入した。

出雲連理。

少女のような外見に、武力チート（制限有）の金髪少年。

世界に絶望し、『死にたい』と渴望し、生きる意志を無くした子供。暗い過去と、歪んだ希望を抱えて生きる連理に、俺たちができることは大したことじゃない。

こうやって、皆で思い出を作ってやるくらいが関の山だ。

でも、それだって大切なことだろうか？

俺たちだけじゃない。連理の周りには沢山の人がある。皆連理の事を想って、沢山の思い出をくれる。

その思い出は、連理を世界に繋ぎとめてくれる”鎖”となるだろう。

『死にたい』という連理を、引き留めてくれるだろう。

「よろしくな、連理」

そうやって思い出を沢山抱えたなら、『もっと一緒にいたい』と思ってくれたなら

「よろしくおねがいしますー！」

それが”生きる意志”というものだろうか？

## 第二将

### 第七話 人は誰しも二面性を秘めている

出雲連理が編入し、風間ファミリーに正式加入した次の日。

直江大和はいつもより少しだけ早く起きていた。連理を起こすためだ。

甘やかすのは無しだと自分でも理解しているし、忍足あずみにも言われていたことではあるが、初めての寮生活に戸惑う部分もあるだろう。自分の部屋にいる限りは一人暮らしと変わらない。

故に、最初の朝くらいは様子を見ることにしたのだ。

「連理ー。朝だぞー」

連理の部屋の前で声を掛ける。男相手ならこうして気を使う必要はない。

そして、連理が男であるということは大和も頭ではわかっているが、連理のあの容姿にまだ戸惑っている部分もあるのだ。

ズカズカと部屋に乗り込むのも気が引けてしまった。

「返事無し。……お？目覚ましか」

部屋の中からアラームが聞こえてきた。軽快な電子音が鳴り響き、すぐに止まる。

「じゃ、入るぞー」

「お邪魔しまーす」

いつの間にか隣に立っている椎名京。

起きていたのはわかっていた。今日も朝から大和に迫って来たからだ。

連理のために若干の早起きをするを見越し、大和が起きるギリギリのタイミングを計っての乱入。

相変わらずのストーカースキルであった。

「あれ、来たのか」

「うん、今から大和と子供の世話をする練習しとこうかと思つて」

「その予定はないし、それ連理の前で言うなよ？多分怒るから」

あずみに子ども扱いされることを嫌がる連理だが、あれはあずみ相手だからという部分もある。

連理の世話を長年してきたと本人から聞かされた大和は、そう判断していた。

それでもやはり明らかな子ども扱いは気分を害するだろうと、京を牽制しておく。

「わかってるよ。それじゃ改めて、お邪魔しまー…おおう」

襖を開け、中を見る京が呻いた。

珍しい反応に大和も室内を見ると、布団の上でぼーつとしていた連理が目に入った。

「あー……これは……」

簡素な室内。昨日荷物の荷解きを手伝った大和は部屋のレイアウトをわかっていたが、それにしたって物が少ないと改めて思う。

必要最低限、机や布団などを九鬼が用意し、それ以外は連理が欲しいと思うものを揃える流れとなった結果、あまりに欲のない連理はほぼ何も望まなかった。

テレビなどの娯楽品が一切無い中唯一、窓際に鎮座する大きな二人掛けのソファが、畳の和室の雰囲気から浮いていた。

そしてそんな質素な部屋の中、畳に敷かれた布団の上で体を起こして眠たげな視線を大和と京を見ている美少女（にしか見えない男）がいた。

少し乱れた輝く金色の髪に、寝起きで欠伸でもしたのだろう、潤んだ瞳。

大きめのパジャマは暑かったのか、首元のボタンが外されていた。そこから覗く白い肌と、艶めかしい鎖骨。

壮絶な色気を放っていた。

「お姫様の朝って感じだね。和室だけど」

「見てはいけないものを見てしまった気がする。和室だけど」

未だ覚醒しない連理を見ながら二人が言う。

「なんか女としては複雑な気分……」

「…うあ、おはよう」

「お、起きたか。おはよう連理」

京が微妙に敗北感を味わっている最中に、連理は覚醒した。

小さな欠伸を一つ。小さな八重歯が見えた。

布団の上で伸びをする連理は、昼寝を終えた子猫のようだった。

「連理。まだ時間はあるけど、着替えて顔を洗っておいで。朝ごはんにしよう」

「んあう」

欠伸の途中で返事をしたため、妙な声で答える連理に苦笑し、部屋を出た。

大和の後ろに京が続き、声を掛けてくる。

「着替えさせてあげないの？」

「そこまで甘やかすわけないだろう。それに…」

連理の着替えを見るには何故か覚悟がある。それは口には出さない大和だったが、

「わかるよ。なんか背徳感あるよね」

「なんで君女の子に生まれてきちゃったんだろうね？」

「大和の剣を納めるためですけど」

「あの、真顔で言うのやめてもらえませんか。俺が間違ってるみたいじゃん」

「じゃ「お友達で」あ、……」

塵も積もれば山となるが、積もる前に掃いておく。

京の『数打ちや当たる作戦』も、一つ一つ丁寧に裁かれては効果は薄かった。

.....

着替えを終えた連理は、トボトボと歩いて洗面所に入った。

未だ完全に覚醒しておらず、寝ぼけ眼で歩いていたが、顔を洗えばすつきりするだろう。

「お嬢様、タオルです。どうぞ」

「有難うマルさん」

洗面所ではドイツ軍人が甲斐甲斐しく金髪ドイツ娘の世話を焼いていた。

マルギツテ・エーベルバッハ。クリスの父親の忠実な部下であり、クリスの姉代わりの人間である。

「おはよお…」

しかし、寝ぼけていた連理はその存在に気付かなかった。

「おはよう連理」

「お嬢様、この者は？」

マルギツテは、目の前に現れた『男子の制服を着た美少女』に興味を持った。

「昨日からクラスに編入してきた出雲連理だ。ファミリーの仲間にもなったぞ！」

クリスは自分の仲間を誇らしげに紹介した。

マルギツテはその姿を微笑ましく思ったが、目の前の少女がクリスと同じ年齢だということに疑問を抱いた。

その間に連理は顔を洗い、歯を磨き始めた。

顔を洗った時点で目が覚めて、マルギツテの存在に気付いた連理は、首を傾げて問う。

「ふおんひひは。ふあえれふか？（こんにちわ。誰ですか？）」

「マルギツテ・エーベルバッハと言います。口に物を入れながら喋るのはやめなさい」

「ふあい」

連理は素直に歯磨きを続けた。

「お嬢様、この者は飛び級での編入ですか？」

「正真正銘、同い年だ」

「フフフ、新しいジョークですか？」

「本当だぞ？」

「……失礼しました」

不思議そうに言い返されたマルギツテはクリスの言うことに嘘はないと確信した。

多少狼狽しながらマルギツテはもう一つの疑問をぶつけた。

「お嬢様、なぜこの者は男子生徒の制服を着ているのですか？」

「男子生徒だからだ」



「フフh」

「本当だぞ?」

「……………」

いくらマルギツテがクリスを信望しており、女神とさえ称える少女の言葉とはいえ、それは認められなかった。

クリスが是と言えば是、否と言えば否を信念とするマルギツテであっても、その現実を受け入れがたいものだった。

(男子生徒? 目の前の少女が? 少年? ……んん?)

「冗談ですよね?」

マルギツテは自らの信念を曲げた。

そこで歯を磨き終えた連理が口を濯ぎ、歯ブラシを片付けて二人に向き直った。

「出雲連理です。 ……2年生の男です」

ちよつとジト目になっているあたり、二人の会話はしつかり聞こえているようだった。

「……………失礼しました」

流石に自身の女神と本人からそう言われれば認めるしかなかった。

マルギツテは目の前の美少女改め連理という少年に、素直に頭を下げた。

「連理、マルさんを許してやってくれ」

「うん、じゃあ、仲直り」

クリスの弁解にすんなりと許した連理は、マルギツテの手を取って強引に握手した。

ほにやつと笑った連理の笑顔に、マルギツテは戸惑いつつ笑みを返した。

(いや、これは無理でしょう…………)

内心では連理を男扱いすることを放棄したマルギツテであった。

「ではお詫びに少し身だしなみを整えてあげましょう。ほら、髪を梳かしてあげます」

早速軽く女の子扱いするマルギツテ。

「ありがとう」

そして何の疑問も抱かずに受け入れる連理。

男子扱いされない原因の大きな割合がこれなのだが、連理が気付くのはまだ先の話である。

「綺麗な髪ですね。とてもサラサラしていて、櫛が落ちてしまいます」  
鏡越しに連理の顔を見ながら髪を梳く。

「本当？」

「ええ」

連理は髪を褒められるのが好きだった。大好きな母親から受け継いだもので、父親がいつも褒めてくれたからだ。

だから髪を短く切ることはなく、最低でも現在の肩にかかる程の長さを保っているのだ。

前髪が少し長めなのも、常に連理の視界に入るようにするためだ。

邪魔だとは思わない。誇るべき自分の髪の毛が、光を反射してキラキラ輝いているのを見ると気分が良かった。

故に、連理が喜ぶ一番の褒め言葉は髪の毛を褒めることだった。

そうして喜んでしまえば更に男子に見えなくなると、連理が気付くのはやはりまだ先の話である。

連理の髪を梳かしていたマルギツテだが、連理を近くで見ることでは気付いたことがあった。

(出雲連理：…とても特殊な気を放っている)

それは、川神百代が気付いた違和感だった。

『猟犬』と呼ばれた軍人は、その嗅覚で連理の強さを嗅ぎ取っていた。戦闘狂であるマルギツテにとって、それは甘美な餌だった。

みるみるうちにマルギツテの纏う雰囲気は鋭くなり、それまで気分よく笑っていた連理も、クリスもそれに気づいた。

「出雲連理、貴方は特殊な気を放ちますね…」

『戦ってみたい』という欲求は、『殺気』に姿を変え、連理に届けられた。

連理から笑顔は消え、鏡越しに見えるのは無表情。

先程の子供らしい雰囲気はどこにも見当たらない。

クリスがこの表情を見るのは二度目だ。

「戦わないよ」

川神百代を前に一步も引かない連理が、再びクリスの前に現れた。初めて見たマルギツテは、その変わり様に益々戦意を滾らせた。

「面白い…無理矢理でも戦わせて見せましようか？」

そう言つて拳を握るマルギツテに、クリスの制止がかかる。

「駄目だマルさん！」

マルギツテの強さを理解しているクリスだ。いつもなら止めることなく姉の強さを誇るだけだが、今日だけは違った。

意外な行動に動きを止めるマルギツテ。

「お嬢様、どうしたのですか？」

「マルさん。連理は確かに強いが、戦わない。戦えないんだ」

クリスが思い返すのはほんの三日前の出来事だ。自分の仲間が不用意な行動をとつたせいで、連理を深く傷つけた。

（もうあんな悲痛な泣き声は聞きたくない。自分が守れるのなら守りたい！）

若い騎士はそう決意した。

「ボクは戦わないよ。ダメって言われてるから。」

心が壊れちゃうんだって。もう壊れたことあるけどね」

淡々と話し振り返つた連理の目を見て、マルギツテは理解した。

自分が危うく危険なものを呼び出そうとしていたことを。

同じ戦闘狂である川神百代との違いは、その経験にあった。

暗く暗く濁つた瞳。マルギツテは戦場で何度も目にしたことが

あつた。

『少年兵』

珍しいものではなかった。相手の中には年端も行かぬ少年少女が混じっている。

気分のいい話ではない。しかし、その中でも特に気分を害するものが、連理のような目をした者たちだ。

無理矢理戦場に駆り出され、生きて帰っても待っているのは暴行、虐待の数々。

自殺をしたくても許されない。死ぬのなら爆弾を抱えて敵陣へ

行つて来いと言われるような連中だ。

その者たちと同じ目をした少年が、今日の前にいる。

それほどの絶望を味わった経験があるのだ。

瞳が濁っている。当たり前だ。彼らは世界に希望を見出していない。  
い。

心が壊れている。当たり前だ。彼らは最も恐れるべき”死”を常に望んでいる。

「出雲連理…貴方は、少年兵なのですか？」

マルギツテは最早戦おうとは思えなかつた。

目の前の少年と戦つても己の欲求を満たすことはできない。

「違ふよ。ボクは兵隊じゃない」

「…：…そうですか」

マルギツテはこれ以上の詮索をやめた。

代わりに、連理の髪を再び梳きはじめた。

「すみません。驚かせてしまいましたね」

「大丈夫」

連理の表情は普段のものに戻っていた。いつもの無邪気な、子供の  
ような表情だ。

「お嬢様も申し訳ありません。お手を煩わせてしまいました」

「良いんだマルさん。ちゃんと止まつてくれたじゃないか」

二人の戦闘狂、川神百代とマルギツテ・エーベルバッハの違いは、上  
位の存在と経験だった。

マルギツテは、クリスと自らの経験から、川神百代の失敗を回避す  
ることができたのだ。

「マルさんって呼んでもいい？」

「ええ。これからよろしくお願ひします。連理」

『猟犬』らしからぬ、優しい表情でマルギツテは答えた。

.....

「おはよー！」

連理が元気良く挨拶する。

島津寮の前で集合したファミリーの面々に加え、多馬川沿いの通学

路で合流したのは川神一子。

「おはよう連理！」

一子はいつものように腰に巻いたロープでタイヤを引き摺っていた。  
た。

「ワン子、なにこれ」

「タイヤよ」

「持ってたの？手伝ってあげる」

重ねられた三つのタイヤを『ヒョイ』と持ち上げる連理に、周囲がギクリと顔をひきつらせた。

「連理：やっぱ力あんだな。俺様と腕相撲しないか？」

「手が届かないでしょ」

「ちつせえのにスゲエよなあ！」

「ビツクリするから急に力を発揮するのはやめて欲しいなあ」

驚愕したり呆れたりするファミリーを放っておき、大和が連理に話しかけた。

「連理、それは引き摺って走ることの意味があるんだ。連理が持つてあげたら鍛錬にならないだろう？」

大和の説明に『ふーん』と反応してタイヤを下ろす連理。

そのままトコトコと大和の前に来て、少し気まずそうにしている。

「間違えた」

「そうだな。でも手伝ってあげようとしたんだろ？連理は優しいな」

元気づけるために頭を撫でて褒める大和に、ほにやつと笑みを返す。

「イイ！美少女風男の娘の頭を撫でる大和！この絡みは好物の気配！」

「京さん凄い興奮してますね」

「まあ気持ちにはわからんでもないが…」

『え？クリ吉そういうのイケる人やったんか？』

「そ、そんなわけないだろう！ただちよつとこう、あの二人を見てるとドキドキするだけだ！」

「十分イケてますよね」

「ククク素質あるよクリス。面白い漫画があるんだ。帰ったら貸してあげるね」

『速攻で同類回収されたー!』

「その腐女子三人!情操教育に悪いから慎むように!」

京の同類扱いされたクリスと由紀江は反論したが、受け流されるだけであった。

「あ、モモちゃん」

連理の目線の先には、ガラの悪い集団に一人で相對する川神百代がいた。

「お、連理に妹に愉快的な仲間たちじゃないか」

「おはよう」

「今日は不良の皆さんか」

「ああ。毎定期的に…ご苦勞なことだ」

百代が話していると、いつの間にか連理が不良たちの前に立っていた。

「お、おい…連理?」

百代が戸惑いつつも連理を止めようとするも、連理は不良の集團を見てから振り替える。

「モモちゃんの友達?」

「え、いや違うけど…」

連理は『ふうん』と一度頷いた後、自然な態度で再度口を開いた。

「出雲連理です」

何故自己紹介?そこにいる全員が疑問に思ったが、不良の一人が我に返った。

「おう、随分可愛いお嬢ちゃんだけどよ、俺らこれから川神百代ぶっ飛ばさねえといけねえんだわ。」

その後で良いこととしてやつから、ちよつと退いてろよ」

不良Aはロリコンだったようだ。

「…?なんでモモちゃん”ぶっ飛ばす”の?」

連理は不良たちの行動の意味が分からなかったらしい。首を傾げて訪ねている。

「んなもん決まってるだろお？調子こいてるアマが気に食わねえからだよ。」

その後は俺たちと一緒に楽しい楽しいパーティーだよ」

下品な笑いを浮かべながら喋る不良B。

連理は話の後半の意味は分からなかった。

が、前半の意味が分かれば十分だった。

「モモちゃんに酷いことするの？モモちゃん悪くないのに？」

いつの間にか連理の顔からは表情が消えていた。

空気が冷たく感じる。不良たちだけではない。

息苦しく、空気を吸っても楽にならない。

連理の後ろにいる筈の百代や大和たちまでそれを感じていた。

連理から放たれる”殺気”。

大和たちは信じられない気持ちで一杯だった。

あれだけ戦うことを拒んでいた連理が、なぜこんなにも鋭い殺気を

放つのか。

そもそも、なぜ殺気を放つことができるのかが疑問であった。

不良たちは大和たちとは違う点で疑問を感じていた。

今まで感じたことのない空気。自分たちは決して平和なだけの一

般人ではないと思っていた。

何度も人と殴り合いをして、死ぬと思ったことだってあった。

しかし、これは『違う』。

今まで感じたことがない空気。

寒くは無い。しかし空気は冷たく感じ、体は震えだす。

何人かは気付いていた。

”これが本物の殺気なのだ”と。

誰も動くことができない殺気の嵐の中、動いたのはやはり、川神百

代だった。

「連理」

連理の殺気を受け止めながら接近し、その小さな肩に手を乗せた。

「連理、大丈夫だ。お前が心配することは何一つないんだよ」

安心させるように、ゆっくりと言葉に気持ちを乗せる。

引き攣らないように注意しながら、連理に向けて微笑んだ。

途端、殺気が収まり、息苦しさから解放された大和や不良たち。

「本当？大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ有難う。…連理は優しいな」

頭を優しく撫でながら、安堵する百代。

不良たちは殺気から逃れることが出来たのだと気を抜いていた。

まだ自分たちは何からも逃れられていないことに気付いていなかった。

「さてお前たち…私の可愛い連理にこんなことさせたんだ…」

ドスの効いた低い声自分たちに向けられる。

先程まで勝てると思っていた相手とは明らかに異なる『武神』に、再び体が震えだした。

否、今日の前にいるのは、『武神』なんかじゃない。

「覚悟はできてるんだろうな…？」

”全てを壊す”破壊神——『鬼神』となった川神百代だ。

当社比三割増しで酷い目にあつた不良たちの声が、登校中の学生の耳から離れなかった。



## 第八話 踏み出す為には犠牲になるものもある

「……定時連絡。マルギツテです、中将」

『ああ、ご苦労。少尉』

「ハッ」

『クリスに変化はないかね?』

「はい、中将。お嬢様は健やかにお過ごしです」

『では、クリスの周辺はどうだね?』

「クリスお嬢様のクラスに編入生が一人。島津寮にも入居し、風間翔一率いる“風間ファミリー”にも加入したようです。クリスお嬢様との距離も近くなるかと」

『ほう、その者の名は?』

「出雲連理。少々お待ちください、写真を送ります」

『……………』

「送りました、中将?」

『ああ、今届いた。確認したよ。……しかし少尉、彼のこの目は…』

「自分も至近距離で確認しました。本人は『少年兵ではない』と主張していますが、心を壊した、もしくは壊れているかと」

『…………クリスとの関係はどうかね?』

「良好なようです。お嬢様や風間ファミリーの面々は出雲連理の心の問題を承知した上で、彼の更生を支援するつもりです」

『余り賛成はできんが…いや…』

「どういたしますか、中将?」

『…………介入は無しだ、少尉。しかし注意は怠るな。何かあればクリスの安全を最優先に』

「ハッ」

『彼について備考は?』

「九鬼の支援を受けているようです。九鬼英雄との関係も良好。ヒューム・ヘルシングの紹介で川神院に仮入門、忍足あずみ等の九鬼家従者の保護対象であるかと」

『成程。ならば少しは安心できるという事だ』

「あと…膨大な気を内包しており、戦闘能力は高いと思われれます。クリスお嬢様の話では、正面からの当身で”武神”を押し倒した、と」  
『なんと。それは本当かね?』

「その場には風間ファミリー全員がいたそうです。その後、川神院にて川神鉄心、九鬼家従者の話を聞いたようですので、事実かと」

『成程…：わかった。少尉はこれまで通りの任務に加え、出雲連理の観察、及び必要であれば警戒。異常発生の際はすぐさま報告するよう。復唱せよ』

「ハッ。出雲連理の観察、及び必要に応じて警戒。異常事態において即時報告します!」

『よし、頼んだぞ。報告は以上かね?』

「ハッ、以上であります」

『そうか、ご苦労。これにて定時連絡を終わる』

「失礼します!」

「……………」

「出雲連理…：少年兵でないとしたら、彼は…何故…?」

……………

Side 大和

「レンちゃん、今日は川神院に寄って来るんだって? 車に気を付けて、寄り道せずに帰って来るんだよ?」

「はーい、いつてきます」

麗子さんにバイバイと手を振って島津寮から出てくる連理を迎え、俺たちは登校した。

どうでも良いが麗子さんと連理の応酬が和む。ちよつと懐かしい気分になった。

「行って来るぜ麗子さん!」

キャップも連理と同じように手を振っている。和まない。ちよつとげんなりした。

水曜日。連理の学校生活三日目だ。

昨日は大変だった。

連理の事が広がると、教室は動物園状態。連理を一目見ようと他学

年まで2―Fを訪ねて来た。

俺たちは辟易としていたし、すぐさま小島先生が散らしていたが、連理は特に気にした様子はなかった。多分なんで集まってるのかわかってなかったんだらう。首傾げてたし。

未だに連理が”男”であることは余り周知されていない。

昨日俺が調べたところでは、どうやら連理は今のところ『男装の口りっ娘』として有名になりつつある。まあこれは時期に事実が広まっていくだろうから時間の問題だ。

だが、放置できない問題も浮上した。

昨日の放課後、早速連理の下駄箱にLOVEなLETTERが投函されていたのだ。連理は意味が分かっておらずゴミかと思つて捨てようとしていたが。

行動力のあり過ぎるロリコンは誰だとすぐさま犯人が搜索された。

因みにこの場合真っ先に容疑者として挙げられる井上は、一昨日連理の性別カミングアウト事件で倒れた後、次の日の朝までうなされ続けて熱を出して昨日は学校を休んだらしい。阿保か。

事態を重く見た俺はすぐさま忍足あずみに連絡。すると連理の身を案じた九鬼英雄まで召喚され、会議の結果、手紙指定の場所には風間ファミリー全員と九鬼英雄&従者という、送り主からすれば予想だにしない面子で向かうことになった。

手紙によれば本日の放課後に校舎の裏へ、とのことなので、本日の放課後は少し忙しくなりそうである。

「連理、学校から川神院への道わかるか？」

「ワン子といっしょ」

なんかの番組名みたいだな。

「そっか。じゃあ大丈夫だな」

「ま、今日の放課後は一度全員集まるし大丈夫でしょ」

京が連理の鞆に着いた小さな鈴のキーホルダーを指でチリンチリンと鳴らしながら言う。

連理は大きめのリュックサックを背負っている。と言つても、連理が小さいので相対的に鞆が大きく見えるだけだが。

このリュックサック、クジラの頭がデザインされており、鞆を開けばクジラが大口を開けたように見える大変可愛らしい一品である。

しかもクジラと言うデザインだからなのか容量もそれなりにあり、丈夫な素材で作られており耐久性も抜群。九鬼の服飾部門の新商品とのこと。

何でも九鬼メイドの李さんが選んだらしい。昨日の夜に寮に来たと思えば連理の世話をしながら生活に不足しているものをチェックし、ついでにこの鞆を連理に渡していったのだ。

その場で『背負ってみて欲しい』と言って連理に背負わせると頬を赤くして微笑んでいた。

表情が変わらない人だなと思っていただけ、あれ絶対内心で悶えてた。絶対悶えてた。

キーホルダーは昨日の放課後に寄り道して連理が買ったものだ。音は小さいが綺麗な澄んだ音を連理が気に入って購入した。

歩く度にチリンチリンと鳴る鈴のキーホルダーを着けたクジラ鞆を背負って歩く、透き通るような金髪と可愛らしい八重歯がチャームポイントの小さな女の子……。

「……なあ、大和。自分はおかしくなってしまったのだろうか…？  
すぐくドキドキするんだ…」

「……俺もだ」

「……言ってしまったのは失礼だが、将来子供を持つなら連理のような子が欲しい…」

「……俺もだ」

顔を真っ赤にしたクリスが胸を抑えながら聞いてくるが、正直俺も気持ちにはわかる。

狙ってんのかってくらい嵌ってるもの。

『クリ吉に子供はまだ早いとオラ思うんだな』

「なんだと!?!」

「松風、頭ごなしに否定してはいけませんよ」

松風はクリスに厳しいな。まあまゆつちと教育方針が逆っぽいな。

「おーっす」

「おはよう、みんな」

ガクトとモロが合流した。いつもと同じようにモロが漫画を読み、ガクトが覗きこんでいる。

「モロ、モロ、それなに？」

連理が興味を示した！

ヤバいぞ。ガクトが覗きこんでるってことは全年齢漫画雑誌の中でも下ネタかお色気方面が多分に含まれている事間違いないだ。

連理が新しいことに興味を持つ事は歓迎だが、これは拙い。この方向は望ましくない。

もしこれで連理が変な方向（ガクト、ヨンパチ方面）に向かってしまえば九鬼からどんな制裁が下されるかわからん。連理の好奇心で俺の周囲が危険で危ない。

「あー？・連理にはまだはええよ」

ここでガクトのファインプレー！

ガクトは人を見た目で判断するからな。珍しくそれがいい方向に向かった。まして連理が男であることを理解しているガクトにとって連理は唯の子供。

女子から嫌われているガクトだが、年上にしか興味がないからか年下女子には面倒見の良い力持ちの先輩に見えるらしく、意外と嫌われていない。（それでもガクトの噂を耳にすれば嫌悪の対象になるが）

「なんで？」

「もうちつとデカくなったら教えてやるよ」

「……むう」

「一応連理は僕たちと同じ年齢なんだけどねえ」

「バカだなモロ、こういうのは年齢じゃねえんだよ。男のロマンを理解するには心と体の両立が必要なんだ」

頭良さそうなこと言ってるけどクソみたいな主張だな。

「ていうかガクトには馬鹿とか言われたくないんだけど」

確かに。

ガクトに除け者にされた連理はキャップに泣きついていた。

「キャップ、ガクトがあの本見せてくれない」

「あん？ ガクトが読んでるやつは俺も読んだけどつまんねーぞ？ それより忍者か海賊の話の方がぜってー面白いのにな」

「そっか」

「大和が持つてるから貸して貰えよ！ そして俺と一緒に悪魔の実を探す旅に出ようぜ！」

「わかった」

「ここでキャップもファインプレー！」

「良いぞ。いい感じに連理の興味を逸らしていく！それでこそキャップだ！」

「でも不毛な旅には連れて行かせんぞ。」

「武神系美少女見参！」

「みんなおはよー！」

川神姉妹の登場だ。ワン子は今日もタイヤを引いている。

「武神系美少女じゃなくて美少女系武神じゃないの？」

「それだとベースが武神になっちゃうだろ。私のベースは美少女だ」  
知らんがな。

「おっ、可愛い鞆だなあ。連理の可愛さが留まることを知らないぞ」

「昨日買った鈴もつけてるのね」

「ん、クジラかわいい」

連理は背中を見せながら自慢げだ。連理の趣味が可愛いのは恐らく李さんのせいかな。あの人の用意した連理の服とかボーイツユで可愛いものが多いし、連理が嫌がるギリギリを狙ってる辺りに溺愛具合を感じる。

「可愛いのは連理だー!!」

姉さんが後ろから連理を持ち上げる。丁度幼児にやる”高い高い”の格好になるけど、連理はきよとんとしてされるがままだ。

「ははっ、そうしてるとマジでガキみてえだぞ」

ガクトがまたいらんこと言う。流石の連理もこれにはムツとしたらしく、姉さんの手をペシペシ叩きながら訴えた。

「モモちゃん、モモちゃん」

「ん？ なんだ連理？」

「もつと高く」

その対抗措置はどうかと思うな。

「高くなったからって評価は変わらないと思うけど…連理もなかなか天然だよね」

京も呆れながら言う。

「なんだお前等。連理がやれっていうんだから良いだろ。いくぞー」

姉さんが屈みながら発射体制に入る。いやもつと高くって”投げろ”って意味じゃねえだろ!?

「ちよ、ちよつと！ モモ先輩どれだけ飛ばすつもりさ!？」

モロが慌てる。確かに姉さんがそれなりに力を入れて投げるだけで結構飛ぶからなあ…。

「よいしょ」

気の抜けた台詞とは裏腹に、ブオン！という風切り音と共に連理が空高く飛んで行った。

「……おい!? 姉さん!? か、川神百代さん!？」

「おう」

「いや”おう”じゃねえよ!! どんだけ飛ばすんだ!」

「連理なら大丈夫だって。私の拳を受けて無傷かつ見切るんだぞ?」

「だからって紐無し逆バンジーはどうなのさ!？」

俺とモロが姉さんに詰め寄る中、キャップやワン子達武士娘は目の良い京を中心に連理の行方を追っている。

「見えないわー」

「どうだ、京?」

「ダメ、私にもまだ見えない」

「初速から考えてそろそろ見えてくると思いますが…」

『どんだけ高く飛ばしたんだっつーの』

「すっげえな！ 俺もやってもらおうかな!」

「やめとけ。連理と違って皆ここまで受け入れ態勢整えてくれねえっ

て」

「あ、来たよ」

「流石弓兵だな京。着地点は何処だ？」

「その武神系美少女の3歩後ろだね」

「お姉さまー、3歩バック！」

「むう、ちよつとずれたか」

姉さんが3歩後ろに下がると、やっと俺たちにも見えるくらいには連理が落ちてきていた。

「さあ私の胸に飛び込んで来い連理！」

やや興奮している姉さんが腕を広げ、全くの無防備で落ちてきた連理がそこへ着地。お姫様抱っこの態勢に。

あれほどの高さから落ちてきても普通に受け止める姉さんも、特に衝撃を受けた様子もない連理も凄いが……

「お前ちよつとは表情変えろよ……」

『肝座ってるってレベルじゃねえぞ連坊』

そんな俺たちの文句も他所に連理は姉さんの腕から降りると、ガクトの前に立って見上げていた。

心なしかドヤ顔である。かわいい。

「……わーっつたよ悪かったよ」

「珍しく素直に負けを認めたねえガクトは」

「まあこれでごねてガクトもどっかに飛ばされたら確実に死ぬもんね」

「連理みたいに真っ直ぐ上に飛ばしてもらえる可能性も受け止めてもらえる可能性も低いもんねえ」

モロと京の言葉に納得した。それでちよつと顔を青くしてるのか。そんなこんなで俺たちの登校再開である。

連理も俺たちも馴染んでるし、何より連理が楽しそうだ。これからもこんな日常が続けばいいと思う。

.....

「と、思ったのがフラグだったんだろうか……」

「……？ 大和？」



「どうしました？」

「いや、なんでもない……。で？ 珍しく真剣な顔してどうした葵冬馬？」

「今日もお休みのハゲの話なのだー！」

そう、教室に着いた俺たちに目の前に現れたのはS組の葵冬馬と榊原小雪だ。

何故か井上がいないが、いつもの何を考えているかわからない微笑みを葵が浮かべていないことから厄介事だと考えられる。

まあ、あれだけ連理連理言つてた井上が今日も学校へ来ていないっただけで厄介事の可能性は跳ね上がるんだが…。

「いえ、準も熱が引いたので今日は学校に来れるかと朝に様子を見に行つたのですが…」

「お前も割と大変だよね」

榊原小雪電波に井上準ロリコンハゲだもんなあ……。あ、コイツも大概両刀だわ。三人が三人とも濃いわ。

「それ程でも。それで、準に体調はどうかと聞いたところ突然『いや、でも連理さんは俺の女神だし、女神ってことは性別は関係なしにロリコンアの民たる俺には崇拜対象になるわけで』等と言い出し、流石の私でも友人が迷走を始めるのは忍びなく今日の所はまだ休ませたのですが…」

「わけわかんねえ」

いや、ほんとにわからん。葵が真剣な表情になるほど動揺してるのはわかるけど。

「とかいうかよく休ませることが出来たな。無理矢理にでも来そうな感じだったけど」

「これでも医者の子息ですから。注射器ゆびさきひとつでダウンですよ」

「なにそれこわい」

「とにかく、これは一度大和君ともよく話し合った方が良さかと思ひまして。そして大和君に私を慰めて貰おうと思ひまして」

「ネットリすんな」

振り返れば、そうやって俺たちが話し合っている間にも連理と榊原

はほのぼの仲良くしていた。

珍しくクリスも一緒にいる。

「レンレンにボクの紙芝居をみせてあげよう」

「うん」

「紙芝居か、楽しみだな」

「『あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。二人の家には孫も住んでいて、伝説の剣を抜いたため』勇者」となりました」

「すごいね。それだけで勇者になれるんだ」

「しかし努力は必要だな。力ある者の責務だ」

「『勇者は王様に命令されて魔王を倒す旅に出ました。でも、旅のために貰ったお金は少なく、回復の薬を五つ買ったらなくなってしまう』」

「ケチだね王様。九鬼の王様とは違うね」

「自分が命じたのだから援助はするべきだな」

「『次の町へ向かおうにも、今までただの村人だった勇者は、スライム一匹にも苦戦して少ない回復の薬を使い果たしてしまいます』」

「スライム強い」

「何故王国は派兵しないんだ!」

「『やっとの思いで町に着いた勇者でしたが、回復の薬でお金を使ってしまい、宿に泊まることができせん』」

「ごりよーは、計画的に?」

「そこも自腹なのか! 魔王を倒す気が無いのか王国は!」

……。

駄目だ、あんまりほのぼのしてない。ツツコミ要素が多すぎる。

俺はそつと紙芝居から目を逸らした。

「それで、準の処置なのですが…」

逸らした先に変態がいた。変態から変態の話なんて聞きたくないわ。

俺はそつと変態から目を逸らした。

「『魔王を見ながら勇者は言いました。『本当に世界の半分をくれるのか?』 魔王は静かに頷きました』」

めっちゃ話進んでるうううう!! しかも闇落ちしてんじやねえぞ  
勇者あ!

今の一瞬で何があつたんだオラア! (錯乱)

「やはり一度大和君と英雄も交えて話し合う必要があるかと…」

……挟まれたよーう (泣)

前門の変態、後門の混沌だよーう (涙)

『魔王は勇者を見ながら言いました。「さあ息子よ、このロケットに乗って行こうではないか。遙かなる宇宙へ!」「本当に、父さんなのか?」勇者は震えながら言いました』

「はやくしないと、地球破壊爆弾が…」

「クツ、何故だ勇者! 探していた父親が相手とはいえ…!」

いつの間にか始まった一大スペクタクルを聞きながら、俺は天を見上げた。蛍光灯が見えた。

俺と勇者の闘いは、まだ始まったばかりだ…。

## 第九話 季節の変わり目は始まりの合図

「席につけー」

2年Fクラスの担任、小島梅子の声が響いた。

土日の休日が明け、連理がクラスの一員になって早一週間が経過した。

連理はその容姿と持ち前の好奇心で生徒たちに分け隔てなく接し、すっかり溶け込んでいた。やはり風間ファミリーとしての付き合いが優先されるため、彼らと行動を共にすることが多いが、概ねクラスの全員が連理を認めていた。

また、学園内でも連理の存在は有名であった。連理の容姿で男子制服を着ていれば少なからず話題に上がり、廊下を歩いていれば注目された。

最初こそ『あの美少女は何故男装をしているのか』と多少の混乱が起きたが、着物や金色に輝く洋服、まして軍服で登校する生徒が存在する川神学園である。すぐに『男装美少女』として誤解が広められた。

その誤解を真に受けて連理に告白する男子生徒が続出し、その度に九鬼英雄まで出張って男であることを懇切丁寧に説明したおかげもあり、現在では『美少女のような男子生徒』として正しい認識をされ始めている。

そうなると次なる問題が発生した。

連理が男であるという認識が広まった結果、今度は女子生徒からの告白合戦が始まった。特に3年生女子からの告白が多く、中では『弟になってほしい』という告白なのかよくわからないラブレターが下駄箱に入っていたときは流石の連理も大和に泣きついた。岳人も嫉妬に泣いた。

更に連理が男であると知った上で告白してくる男子生徒もいたが、こちらは悪質な意図が見えていたので大和による同性愛者の多いE組男子を介した制裁が成された。

余談ではあるが、最初の出会いから連理に並々ならぬ執着を見せた男、井上準については、親友の言動に珍しく動揺を隠せなかった葵冬

馬と大和の間で協議が行われた。

協議の結果、榊原小雪と仲の良い連理を井上から遠ざけることは難しく、ならばせめて近くについても害にならないよう教育し、現在連理に対する悪意ある告白を潰すために活動している。

学園の外では、一週間のうち二日は放課後に川神院での修業が行われ、基礎トレーニングと気の扱いを学ぶ。二日と言う少ない日数なのは、あくまでも連理の『社会体験』のためであり、様々な遊びや学習をより多く体験する時間を確保するためである。

金曜日の夜には連理初参加となる『金曜集会』が開かれ、そこで再び連理の歓迎会がささやかに行われた。翌日の土曜日には再び川神案内と、今度は七浜まで範囲を伸ばして一日遊んだ。

精神をガリガリと削る告白合戦も井上による沈静化の目途が立ち、土日を使ってファミリィが連理をもてなしたため、ようやく素直に日々を楽しむ始めた連理は、今日も意気揚々と登校して席に付いている。

現状の確認が終わったところで、現在は朝のホームルームである。担任小島が教卓の横に立ち、本日の予定や注意事項などを簡潔に述べている最中だ。

「来週には水上体育祭がある。各自水着の準備は怠るな」

水上体育祭と聞いただけで盛り上がるクラスの男子生徒たち。ざわざわと煩くなりかけたところで、小島が鞭を鳴らした。

「静かに！競技内容は掲示板に張り出されているため、確認しておくように。例年通りサプライズ競技なども組み込まれる。皆と相談しながらどの競技に出るか考えておけ」

川神学園の体育祭は出場者をハッキリと決めないため、当日の競技直前で出場者の変更が可能となる。

他のクラスの出場者を見て人員を配置することができるのだ。

ホームルームを終え、小島が出ていくとクラスメイトは始業までの時間を自由に使う。

連理は体育祭に付いて大和に質問していた。

「水上体育祭って?」

「うん?…あー、そうか。ま、不思議だよなあ」

大和は川神学園ならではこの行事に疑問を持っていない自分に軽くシヨックを受けた。一年過ごしただけで随分と常識を忘れてしまったものだ。

「運動会の水泳バージョンと言えばいいか…」

「…うんどう、かい」

簡潔な説明にも首を傾げる連理に、大和も『あー…』と気まずそうな声を上げた。今まで学校に通わず、九鬼に保護されていた連理なのだ。しかも話を聞くに精神状態も良好ではなかった筈。一般的な知識に欠けるのだろうか。

「ごめんごめん。まあ、学校の皆で泳いでレースしたり、水の中でスポーツをしたりして、どのクラスが一番得点を多くとれたかを競うんだ」

「……………わかった」

「……………うん、実際にやってみればわかるからな」

恐らくわかってない連理に、大和は当日できるだけ傍にいて説明してやろうと苦笑いを浮かべた。

……………

Side 大和

「おーっす、連理いるかー」

「レンレーン! ウェーイー!」

昼休み、学食から帰ってくるにあずみさんと榎原小雪がやってきた。今日は九鬼英雄がいないため姉御モード(九鬼不在&連理を前にする時のモード)だ。

土日に七浜まで遊びに行くことを連絡したり、ちよくちよくこうしてクラスに来るためあずみさんとは話す機会が多い。

できるだけ仲良くなつて九鬼とのパイプを繋げたい。

「あずみ姉とユキだ」

「あれ、九鬼は?」

「英雄さまは仮眠を取られてる。それより今日は水上体育祭について

だ」

連理から聞いたけど九鬼って家に帰っても仕事が忙しくてまともに休みがないらしい。その上で勉強もして学年上位にいるんだから大したものだ。

「連理、お前水着持ってないだろ」

「うん」

「あ、そっか。じゃあ買いに行かなきゃな…って、それであずみさんが来るってことは何かあんの？」

「いや、特にこつちから言う事はねえし、水着も常識の範囲内なら文句は言わねえ……が」

「が？」

「ラッシュガード…着せてくれ」

「日焼け防止…って訳でもなさそうだね…」

「ああ、よく考えてみる。…連理の見た目で海パン一丁だぞ」

「…」

「…オメエも分かるだろ？…なんかこう、なあ？」

「…わかります」

あずみさんは深いため息を吐いた。

…うん。お疲れ様です。

因みに連理は既に榊原と楽しそうにお話してる。いつみてもほのぼのするコンビだ。

「まあ、学園の許可は取ってあるからパーカータイプとかで大丈夫だ。さつきみたいに日焼け防止とでも言って買わせてくれ」

「了解」

「あと、これは出来ればいいんだが」

「どしたの？」

「買いに行く日程を教えてくださいねえか？ 李の奴が行きたいって三回転捻り土下座して頼んできてよ」

なにそれ超見たい。

「…あの人そんなに連理好きなんだな。この前も寮に着て散々可愛がってたし」

「アタイはもう一種の病気なんだろうなって思って接してる。九鬼ン中じや常識だな」

「スゴイな李さん」

そう思われても連理の事がある程度任せられてることだもんな。「取り敢えず了解。日程決まったらあずみさんに連絡する形で良いかな?」

「ああ、ワリイな。多分、李がまたなんか美味しい物持ってくからお前等で食ってくれ」

「ははっ、楽しみにしてるよ」

あずみさんも連理がらみになると周囲にも普通に優しいんだよな。いつもはS組らしい偉そうな感じだけど。

だからこういう話をしてる時はとても好感が持てる。

「はっ!?フラグが建とうとしている!?!」

京はスルーっと。

「おーい、連理ー」

「あいー」

「ういー」

連理を呼んだら妙な返事で釣れた。ついでに榊原も釣れた。ホントに可愛いなこのコンビは。

「今度の土曜日に連理の水着も買いに行かないか?李さんも来るってさ」

「李も?...行く」

お、ちよつと嬉しそうだな。やっぱ連理も李さんが好きなんだろう。

「ねーレンレン、ボクも行っついていい?」

榊原が誘いに乗って来た。珍しいな、こうゆう時は俺たちとは別で葵たちと連理を誘うと思ったんだけど...

「ん、行こう」

連理は頷いて答えた。でも俺たちの中に榊原が混ざっても大丈夫だろうか?

一応葵たちも一緒に居たほうが榊原も俺たちも安心だろう。



「榊原さん、葵たちも一緒に来るのかな？」

「おー！じゃあボク、トーマ達に言ってくるね！」

瞳を輝かせてスタターっと教室を出ていく榊原。あの三人は仲が  
良いからなあ。

「大和、良いの？」

モロが声を掛けてくる。まあ普段だったら態々あの三人を加える  
ような提案はしないよな。

「今回は連理の買い物がメインだし、葵たちも連理には気を遣える奴  
等だ。榊原は連理と仲が良いけど、俺たちの中じゃ連理にしか心を開  
いてないからな。空気が悪くなるよりは良いだろ」

「うーん…」

「俺たちはいつでも連理と居られるんだし、今回は俺たちが気を遣つ  
てやらないとな」

「…そうだね、連理も僕たちだけの交友関係って訳にもいかないもん  
ね」

モロもやつぱりいいやつだよなあ、クリスとまゆつちが加入したと  
きみたいになちよつと懐に入る線引きがしっかりしているけど、それを  
無しにすればこうやって柔軟に考えることも出来るんだ。

人見知りが無ければ俺たちの中でも大人だと思う。

「という事で、今度の土曜日に決まりそうだけど、大丈夫かな？」

「ん？おう、李にも伝えとく。集合場所や時間なんかはまた後で教え  
ろ、じゃあな」

あずみさんはいつの間にか連理を説教してた。今日は勉強をしつ  
かりやっているかの話で連理が頬を膨らませていた。相変わらず反  
抗期のようなだ。

俺にそういうとあずみさんはさっさと教室を出て行った。

再び教室の中を振り返ると、話を聞いていた風間ファミリーの面々  
が集まっていた。

「と、いう訳で今度の土曜日、連理の水着選定会、行く人ー？」

「はいっー」

「はーっ」

「はい！」

「パスだ。葵の野郎が来るんじや調子狂うぜ。榊原だけならともかくな」

「僕もその日はちよつと…」

「俺は行くぜ！」

反応は様々だな。

参加表明をしたのはワン子、京、クリス、キャップか。後で姉さんとまゆっちにも聞かないとな。多分参加だろうし。

「京は大丈夫か？葵たちも一緒になるけど」

「ん、まあ一日だけだし…。それに結局連理を挟んでの交流になりそうだし、それくらいならね」

京も連理が来てから変わったかな…。以前ならこんな言い方すらせずに参加を拒否するか葵たちの合流に難を示すくらいならしていただろう。

…うん、連理は俺たちにいい影響を与えてくれる。連理と一緒に俺たちも成長していけるんだ。

こうやって連理との思い出も増えて行けば、李さんのお願いも達成できるかな…。

………

と、いう訳で、土曜日。

予定通り連理の水着を購入するため、俺たちは集まった。

参加者は俺、連理、キャップ、姉さん、ワン子、京、クリス、まゆっちの風間ファミリーに加え、葵冬馬、井上準、榊原小雪に、李さん。そして今日もクリスの世話をするために島津寮に来ていたマルギツテさんだ。

李さんは一応仕事として来ているようで、いつも通りのメイド服姿だった。

集合場所である商店街ではなく、朝から島津寮に来てお土産を持ってきてくれた。出発まで結構時間があったのでみんな美味しくいただいた。

「さて、全員集まったな」

「予定時刻の5分前です。当然と知りなさい」

人数を確認して全員に声を掛ける。

連理は既に榊原とマシユマ口を食べながらホンワカ空間を生み出している。そしてそれを微笑ましく見守っている李さんとまゆっちに、同じような顔で葵も見守っていた。

「葵、頼むから連理を口説いたり井上を暴走させたりするなよ」

「ええ、勿論ですよ。準も今では恋愛の意味ではなく、憧れや崇拜に近い感情を持っていくようですし。ユキとも仲良くしてくれていまずし、それに…私が口説くには連理君は少々…眩しすぎる」

「連理マジですごいな」

まさか葵をしてここまで言わせるとは。

井上は昇天しそうな勢いで連理を見て涙を流している。どこかに感動要素はあっただろうか？

「おおお……女神が、女神が微笑んでおられる……」

「おいハゲ、わかっていると思うが暴走するなよ」

「分かってますよ百代先輩、俺は気付いたんだ……連理さんは、本来俺なんか近づくことすら許されない女神……。それをあの御方はこうして近くに侍ることを許して下さい……それだけで、俺は満足なんです……」

(何言ってるんだコイツ?)

「おーい、出発するぞー」

いい加減移動しないと時間ももたないからな。

因みにこの後はキャップの提案により昼をどこかで食べてそのまま遊ぶことになっている。参加かどうかは個々人に任せる。

歩き出すと予想通りというか、やはりある程度はグループ同士で固まっていた。

連理を中心に集まっている榊原、姉さん、李さん、まゆっち。

風間ファミリー中心の俺、キャップ、ワン子、京、クリス、マルギツテさん。

そしてすれ違う女性に声をかけまくる葵に、その隣で連理を見て何故か拝み続ける井上。

…最近あの二人にツツコミ所が多いんだが誰か相談に乗ってくれないだろうか。

「水着という事はスポーツ用品店か？」

「ラッシュガードも買わなきゃいけないのよね？」

「格好良いの選ぼうぜ！」

「お嬢様、機能も重視しなければ連理が泳ぎにくいと推測します」

「連理には是非スクール水着を…」

「絶対嫌がるからやめろ」

身内へのツツコミも忙しいんだが俺過労とかで倒れないだろうか。

「連理く、私にも金平糖いっこおくれっ！」

「ん、あーん」

「オウフ、ナチュラルにやりおるな…」

「連理さんいつも金平糖をお持ちですね」

「あれは九鬼の揚羽様から頂いているものです。揚羽様も連理を弟のように思っておられますから」

「ボクもレンレンにマシユマロあげる。あーん」

「あー」

『二人が可愛すぎて、おっちゃんお小遣いはずんじやいそうやわ』

「松風は御二人の何なのでしょうか…」

もう俺の癒しはあのグループだけだわ。松風の気持ちかわかるもの。

今日も連理の可愛さで商店街がヤバい。良い意味で。

……………

「なあ、若。もしもの話だけだよ」

「何ですか？」

「もしユキがこのまま”あっち”に居たいって思うなら、どうする？」

「ユキがそれを望むのであれば、その方が良いでしょうね。私たちの中で、ユキだけは巻き込まれたと言える立場ですから」

「だよなあ…。少し寂しいが、ユキにとってはそれが幸せかもしれないな」

「準…貴方も、良いのですよ？」

「馬鹿言うんじやねえよ。俺は最後まで若に付いて行く。決めた事だ」

「有難うございます。惚れてしまいそうですよ」

「やめてくれ。俺は若に付いては行くが、ロリコニアを離れる訳じやねえんだ」

「それは残念」